

資 料

無為庵・小林勝次郎の「楫（かじ）」

木 村 洋 二・小 林 純 子

A Rudder (Kaji) written by Kobayashi Katsujirou

Yohji G. KIMURA and Junko KOBAYASHI

Abstract

“Kaji (vol.4)” written by KOBAYASHI KATSUJIROU, an unknown contemporary Japanese Buddhist philosopher, is introduced. KOBAYASHI was born in 1898 in Niigata and died in 1989. He had radically practiced “MUI” (non-doing) for more than 60 years in his secular town life. Carefully watching the movement of Ego and desire, KOBAYASHI wrote more than 30 books, later volumes of which were entitled as “MINNANOMONO” (Belonging to nobody). His thought seems to have some common elements with Jiddu Krishnamurti.

Key words : Kaji, Rudder, Kobayashi Katsujirou, mui, Muian, Minnanomono, nothingness, Suketa Shigezo

抄 録

知られざる哲人小林勝次郎の著作『楫（その四）』を「資料」として紹介した。小林は1898年に生まれ、1989年に没した仏教系の求道哲学者である。20代半ばで在家のまま無一物の生活を決意し、極貧のなかで自我と欲望の動きを見つめつつ、孤高の求道生活を送った。その思索の成果は30巻ほどの私家本として出版されているが、その思想も生涯もほとんど知られていない。いかなる名にも権威にも生活の必要にさえも屈せず、普遍の道を求めつづけた無為庵小林勝次郎が、私たちに語りかけるものは深い。

キーワード：小林勝次郎、無為庵、かじ、みんなのもの、助田茂蔵、無一物、無所有、聞

1. はじめに

小林勝次郎は1898年に新潟県見附市に生まれ、1989年に没した孤高の哲学者である。激しい求道の青年時代を送った後、20代後半に思うところがあって無為を宣言し、文字通り無一物のなかに座り込んだ。清貧のうちに独りゆるぎない瞑想を重ねる小林を慕い畏敬する人々と時折集まりを持って、自我と欲望の動きを凝視して生きる道について語りあった。

そうした瞑想の生活のなかで小林を訪れる思念を言葉にしたためたものが、私家版の清楚な本に編まれて三〇冊ほど出版されている。筆者（木村）が小林勝次郎に出会ったのは山行の途中にふと立ち寄った福井駅前の古書店であった。何気なく手に取った『揖（かじ）その四』を開くと、「コトバという場合は 二人以上のことだ 一人は音であれど コトバではない」という言葉が飛び込んできた。そのときのふしぎな感動は今も鮮明である。

小林勝次郎が何者であるかも知らないまま、手漉き和紙にタイプ印刷された独特の文章を何度か読み返すうちに、それらの言葉が水滴のようにしたたり深い意識の層にしみていった。クリシュナムルティやバスターユを読むにつけては、日本になぜこのような剛直で自立した思考者が生まれぬのか、とすこし自虐的になっていた小生には、日本語で呼吸する力強い思考の息吹にふれる新鮮なよろこびがあった。

まもなく、小林勝次郎の求道を支えつつ、そのことばを和紙にタイプ印刷して出版してきた大阪謄写館の助田茂蔵氏に会うことができた。老師から小林の思想や生き方を伺ううちに、現代日本における小林勝次郎という存在の希有な位置と不動の意義を確信するようになった。

自己の核心にとどまりながら欲望と自我の狡知をみつめ、偽りと真実について、法と言葉について、対話と真理について妥協することなく考えつづけたひとりの哲人(フィロソフィア=知を愛する人)とその思想の軌跡を、未来に伝える手がかりとなることを願って、著作の一部をここに資料として紹介する次第である。勝次郎のことばに深い関心をよせる大学院生の小林純子が末尾に小さなメモノートを付した。

主要著作の『揖』(小林は口と耳のつくりに対し、へんの木を手に書き換えてかじと読ませている)は昭和33年に「その一」が出版された後、昭和47年の「その六」以降著者名の無為庵主人小林勝次郎が消える。昭和62年からは題も『みんなのもの』と変わった。言葉による思考が「私」一人に帰属するものから、まさに「二人以上のこと」となったのである。無為庵を号したその人は、ミカン箱と卓袱台と、小さな鏡台を残して平成元年に他界するが、その前に白木の位牌を一五個求めさせ、これに「みんなのもの」と墨書きして近い人々に与えた。そのひとつが石碑として、松坂の西弘寺に建立されている。なお、小林の全著作は、無為庵文庫と名づけられ、福井県坂井郡三国町新保の教林寺に保存されている。

2. 『無為庵主記 揖 その四』

- 1 ことば
- 2 法然と盗人耳四郎
- 3 三願転入
- 4 遺産相続
- 5 口称本願の返事
- 6 冷たい私

序

コトバと云う場合は 二人以上のことだ

一人は音であれど コトバではない

二人以上の場合のみコトバを用いる

一人の場合は音だけである

二人以上の場合でなければコトバは 人間社会にはコトバの役割を果たさない

文化自由 社会政治 経済凡ゆるもの、原動力を作るものは この二人以上のコトバである

二人以上でなければコトバとは云わない

聖書には初めにコトバありきとある

私は二人以上の場合で話す場合のことをコトバと信ずる

そして二人以上は何人の集合に於いてもコトバである

それならば 二人以上の場合話すときはなにを土台にしているのか

面白いことにはコトバは 聞く(きく又はもん)を土台にしている

聞くことは 人間集団社会を生きる 基本原則になっている

二人以上で話して お互いが「話をわからせ」「わかる」のこのように思っている話をして
いるうちに、人は幸運にめぐまれると いや話とは 聞いたり 聞かせたり だけではない
話は聞くのだ、この話を聞くの 聞くは 自分の中にあるものに 聞く このことにふれられ
るのである

外のことを聞いた 外のことで語ったと話つゞけているうちに 幸運にも気が付くと 聞くとは
外ではないのだ 自分の仲にある自分を聞くのだった このことが聞こえてくる話が話して
いるうちにあるのだ

人に聞かせるでもない 自分が聞くでもない 人に語るでもない 二人以上集まって話してい
るうちに 必ずとも コトバは 自分のなかにある自分のことを聞くのだった しかも慈しみ
温かくきわらせてくれるハタラキはコトバである

一人では音だから自分の中にあるものにはボウギョにはなれど聞くにはならない

自分の中にあるを聞くことに於いて初めて話即ちコトバが社会生活の協同体の根本になったのである

コトバは人間歴史を製作するものである

歴史を製作するコトバを 自分の中に聞く 自分のコトバは又社会生活の協同体であるを知るべきである

コトバを自分を聞くことが出来ることに廻り合うてみると 自分に聞くコトバが知れる

自分に聞くコトバを知ってみると 少しもむずかしいことではない 極めて自然のまゝにコトバは話し合っているうちに みなさんと俱に必ずや

自分を聞くコトバであったと知られるこの場合覚える心持ちとは天地の差異のある事であるは云うまでもない

語り合うに覚える 覚えたが少しでもあるうちはコトバを聞いたにはならない

コトバを聞くは自分に聞くのだから 覚えたり 覚えるは用はなきない

自分を聞くコトバ コトバは自分を聞く

この辺の消息を聞即信と先人も云っている

だからコトバは必ず自分が聞くのではなくして自分を聞く 自分を聞くことに於いて 信は確立する

この信 コトバである 自分を聞くのほんとうのコトバである

コトバ語り合う大きくは社会小さくは家庭 和も皆この 自分の中に在る聞のことだ

コトバは 外に聞かず 外から聞くのおれがの経験体験でなしに、純に 自分のなかの自分に聞くにめぐり合うように作られているのである

人は語り合うての二人以上の場合に於いてのみ不思議にも自分の中の自分に聞えるを悦べるものである

さてコトバを語り合う二人以上のことを場・処・集と云うて来た そうしてこの場・処・集まりに於いてコトバの効用を自分に聞いて この語り合うに量り知れない深信の意味を知らされるものである

深信の意味と云うても これがなかなか難至難行とてとてもとてもそれはよいの事ではない

なぜかどうしても 音が聞えるように外の事(経験・体験・自覚)で間に合うことになっている人間であるからである、困ったことにも人間では 外のことを聞いたら覚えたになる 覚えたら手に物を持つように持つ これではどうにも聞いたにはならないのだが これから定められないから仕方がないのである 悲しい事なれどやむを得ないのだ

しかしむずかしいかといえそうではない語り合っているうちに なにかのはずみで 縁があると果実が木で熟れるのか 木が熟れて実が熟れるのかは知らないが 少しも無理にならず

に 覚えた わかったの執を通り越して 純に 自分の中にあるものにさわらせてもらえること
とも純にあるのであるのが コトバである 丁度聖母マリヤの像のように

以上コトバの不可思議を合掌して

昭和四十年六月

1 ことば

ことば 自分を語る ことば

ことばは自分を語る

自分を 語ることばにはうそはない

うそ のない ことばを語るようになるにはを思う

ことばは 正真正銘に 自分を語っている

本来コトバは うそは言われぬものだ

うその言われぬ 言葉を コトバと知る事は ようい事ではない

ことばの正直 うその言われぬ ことば

本来日常使っているのに 苦しむことはないはずだ

しかるに世はあげて ことばのうそにあげ暮れ 困っている

ことばのうそに 明け暮れるは 人間はどなたでも「イラナイモノ」を持っているからだ

このイラナイモノのしわざで イラナイモノは いるように思うことはやめられない

いるならば やめられるのだ

イラナイから やめられない

△

いるならば やめられる 入用が 入用ならば必ずやめられる

この事は間違いはない

イラナイモノはやめられない

うそでもほんとうでもない いらぬものはやめられない

そしてこのいらぬもので人は困る

困るのはどなたに於いても いらぬ品物だ

困るとは このいらぬ品物のしわざで困る

このいらぬ品物はどんな動きをするかと云えばおれがおれの要求を持つ動きをする

そしてこのいらぬ品物を執るからいよいよ困る

いらぬ品物は大切になさるものだ どなたでも いらぬ品物を いらぬと知るはようい
の事ではない、余りにもムダの努力のように思われてならないが

しかしこの事もソートして居かねばならない品物のようだ

△

いらないものを大切になされるは それは その人の人生だ

良いも悪いもない

良いも 悪いもないのに 私は いるとかいらないとかと 書いた 恥ずべし

書いたことは私であるのに、書いたことを文字として書いている

少しの責任も持たずに 文字として書いている

しかるに書いた文字が 私が書いたのではなしに 私になると、私が文字で 文字が私だ
私の文字 私のコトバだ

だから書いた文字は 私と云う人間の責任の主となった

書いたことにうそはないとは こんな順次次第のことだ

だからコトバは文字 文字は コトバ

コトバは書いた文字のこの文字は正直な私

故に文字にうそのない文字は 生ける人の言葉である

近頃いよいよその感を深くする 書くものにうそのないをば 文字は書く

書いたものは正直の私を写す

こんなあたりまえの事ががわかるまでは 好きな事を 好きにながくながく やらないとわ
からないことである

△

人は好きなことをするものだ

いやな事はしないものだ

私も六十七の今日まで 好きな事の他しなかったを

ようやく近頃好きなことをして来てわかった

好きな事は楽しみのように思うが、好きな事は苦しいものだ

苦しくなかったら 好きな事ではない

そうすると好きことは 好きな程、苦しい中に その苦しみが苦しい程好きで 好きで や
められないこのことが 好きでならないと 在るのだ

しかしこの好き事は「逆も又真なり」と異質（コトナル）である

苦しくない好きなことなぞ 好きな部類ではない

六十七まで好きなことを 苦しんでやって来てこのことは ようやく信じられるようになった

苦しいこの好きなことを 好く好くすきであつたらしい この好きなことを

好くも好くも 好きに なんにもせず この徒食に三十余年 いたずらに過ぎた

苦しいが 好きで好きであつたようだ

好きなこと 好きなことを 仕方なしに好きに どんなに困ってもやっているうちに（何十年

間) 家族も世間も赦してくれるものだ

赦してもらわれないものは ほんとうにどうにもならないの 好きなことではない

どうにもならないの好きなことなら 家族から 世間様からは 勝手にことを言わせても
らうが メンドウ は見て下さるに決っている

好きなことは止められない なんの理由もない好きに 家族を世間様をどんなに困らせても
世間様からは家族も私も赦されて下さるものだ

ほんとうに仰ぐ不可思議のことであった

もしも赦してくだされないとすれば、それは 好きなことではない

人々は好きなことを知らないで 好きなことをして困っているのではないでしょうか

好き事とはなにか

好きなことは 形のないものだ

好きなことに 形は在っては好きなことではない

だから 好きなことを 好きに 続けるは(形而上)に決別(オワカレ)してからだ

好きなことを 好きなことのその為かどうかは知らないが 歌聖西行法師は、好きなことを
ば止めてほしいと 泣きすぎる妻をば えん側より突き落して 好きなことと旅に出たと聞く
親鸞も関東の妻子お友だちを捨て、関東を出られた

好き事は余りにも大きな悲しみのあるものだ

私も縁あって 去る年この西行法師終えんの地河内の国広川寺を尋ねて一泊をしのんだ

七十二才にしてあの山奥の広川寺にたどられ 翌七十三才にして当寺で浄土に帰られたと住
職から聞いた

七十二才の老翁 この世に生きる限界の体の上に承知しつ、杖をつき 逝く先の往生を慕っ
ての高い天に近ずかれたを偲んだ

△

好きなことが見付かる 好きなことが

好きなことは疲れても 疲れても あきは来ない

好きなことは損益にはかゝりない

損益につながる 好きなことは損益ではあれど 好きなことではない

さて其の好きなこと 好きなこと

好きなことの為に 好んで淋しい河内の山奥へ しかも少しでも高い処へ 高い処へと 其の
手には西行の浄土は在ったのであろう

七十二才 笠置の山に 寺を尋ね翌七十三にして往生を遂げられた

高い山の寺の西行法師の手は浄土に近づくをむかいていた

憶うに多分法師には七十二は身に感ずる往生は在ったのであろう

翌年七十三は浄土に還られたのだもの さすれば 往生を感じつゝ、あの坂道を 山奥の広川寺

に 歩をふみしめられたは浄土にあこがれての 七十二の老いを歩まれたのではなかろうか
しかも手は届く 浄土を少しでも近くに近くに 近いを杖として 高い山奥へ
近いは 七十二は杖に 好きことを歩まれた西行法師
七十三は遂にこの杖もいらなくなられた
広川寺は西行の七十三であった
七十三は広川寺の法師
広川寺は法師の好きこと
この好きなこと この世に消える事はない
好きことを伝えて 消えることを知らない
西行法師の好きなことの淋しい独りを広川寺で身にしみた 好きことは人の世には淋しい温い
ことであった

△

ことばは 修正 手直しのきかないものだ
手直しのきかないことに ことばは ことばの絶対の権威をもっている
一度（ヒトタビ） コトバ したら もう手直しはきかない
手直しはきかないから 全責任は このことばは負っている
コトバの重要且偉大なるを怖れた日であった
詩・文学・芸術はみな どれも手直しはきく
何度でも書き直せる 手は加えられる
コトバは 手は加えられない 書き替えも出来ない
コトバは 自体常に私の全部であり 人格である
書き直し修正のきかないコトバには 話せばわかるは成り立たない
コトバが コトバである以上には 話せば話す程混雑が増すのみである
コトバは人類の初めより 人類への細ボウ原子化したものだ
このわれわれの使うている コトバは 人々が承知しても しなくても
コトバは神であり 仏である
神であり 仏である コトバは神のもの仏のものである
それならば人間のものはと探す 音声だけが人間のものであった
それをば 人間の音声をコトバとあやまっている
そしてこの音声を人のコトバと使うている
音声は人間の作ったものであるから 人間の執より一步も出られない
人間の作った 音声を絶対のものだとあやまっている
人間の音声 即ち人間の作った（コサエタ）音声には争うことより一步も出られない
神のコトバ 仏のコトバには争いは加入するスキはない

神の作った日常生活の用語をば人間の作った コトバに使うてはなんの価値も意味もないものだ

神のコトバはいずれの場合 争いのないものである

この神のコトバを聞く耳を知らない、音声を聞く耳はあれど

音声の耳で音声を聞く生活、冷酷無悲のものである

音声を聞く耳は 音声で事足りるとこの音声を聞かんとする

話す人達も 音声のコトバの全部を全うしたものと信じて聞かせんとか、り果てるに是れ懸命である、聞く人も又この音声を聞かんと耳をそばだてる

あわれにも悲しむべき人の生きる悲惨な冷酷無悲が通入しているではないか

これでは人は生くるに 安らかさなぞ 生活出来るはずはこの世にはないではないか
聞かせんと声を大にするのも 聞かんと耳をそばだて、懸命是れつとめるが あわれにも 聞かせたにも 聞いたにもならない

この聞かせる 聞かんとする態度は 覚える事になり 覚えさせるを目あてにコトバを使う
俗に語る聞法とはこんなものではないか

聞く事は覚えることではない

覚えたら(少しでも) 冷酷無悲の横暴に狂うことは間違いなけれど 聞いたにはならないを
人々は知ろうとせぬ

聞くとは なにをどう聞くのか

聞くはコトバを聞く 聞くは神のコトバを聞く 聞くはコトバである

聞くコトバはどんな中味のものか

聞かんとするに力を入れる心持ちは介入しないことになっているを云う

聞くに 聞く(オボエル) 心持ちの持ち合わせが少しでもあれば 人は生きているうちは聞いたは 無いものだ

不用意にも聞く 聞かせる 聞いたの横暴至極無茶苦茶が横行していることの人の造ったコトバの世相を悲しむのも私一人ではあるまい

しかしこの間違った聞かせる 聞くのあやまりを悪いことだなんとかしなければならぬと云う心持ちではないことは言うまでもない

唯悲しむべきことであると憶念の念がするだけの事であるに黙するのみ

私のような無能(ノウナシ)の不徳人が なにを口外しても世の中のなんの為にもならないことは私は私にあきれる程失敗を繰返して来た

だからせめて 思うことだけをこうして書く これが精一杯である 正信だの聞法だのと語る(コトバ)は私の分ざいではないは六十七は有難くもよくよく教えてくれた 心静かにこのことは合掌している

それで書くとするか

聞く態度を昔から聞法と云うて来た

聞かせる 立場 はなんと云うのか 今日まで私は 聞かせる立場のことを聞かない
聞くは聞法でよいとしても 聞かせる立場が はっきりしなくては片手落ちになるのではな
いか

聞かせる立場は 聞く立場に対して より高度にその聞法が純粹であるべきである
縁有って 聞かせる立場の純粹とは、聞かせるものは無いを云う
このことを身を以て聞かせる人は 聞かせるの立場に生きなければならない
聞く立場の人には聞かせる人が 聞かせんとする心持ちがあつては 聞法 にはならないを
聞かせる人は身を以て生きていなければならない
だって そうだよ いくら一生懸命に聞かせんと話しても 聞く人に「聞くものが」消えて
しまわないうちは 聞いては来ないのだから
だから聞法とは 聞く態度の完全を聞法と云う

聞く人は聞くものは消えた

聞かせる人は 聞かせるものは無い

ホッテ置いても聞いて来る

聞法は 聞くものではない

聞くものでない聞は、人間の憶いでは聞こえない

人の憶人の作ったコトバは何の意味はない

聞くもの、無い聞を今日聞く

私の憶いからはヒマをもらった

ヒマをもらった 私の憶いで聞けるはずはなかったは聞いて来た

聞くものは無い、わからないも どうにかしなければならぬも消えた

わからないのあるうちは 未だ聞くもの、ある人々ではないか

聞くものを求めて 迷うて来た私である

見当ちがいを 目あてに歩いて来た

気付いてみたら聞くものは消え失せた聞

本来 人間に用のある事ではなかった

人間に用のある聞は 常識であり倫理である

宗教の聞は常識でも倫理でもない

それならば 宗教の聞とはと問わる、ならば知らぬと答える

知らぬはずだ 聞くものが消えることが聞法であるのだから 不幸にして話する立場に人様
が私を認めて問うて下さるので当然に知らぬと答えなければならないのである

なぜか人様より先に 聞くものが消えてなくならなければならないのであるからである
聞くものが消えてしまえば 聞かせるものも又ない

聞かせるものがなければ 聞く人も当然に聞く心持ちは消える
聞く心持ちは消えた 聞に初めて聞法と熟れる
聞法は熟れるものだ、熟れた 聞法でなかったら、法を 聞くではない
だから聞法とは 熟れているか 否かに 聞法の生命は賭けられている
熟れた 聞法とはと 問わるならば、熟れて みなければ 熟れたものではない
熟れたものにならなかつたら自他のものにならない
聞は熟れた 聞でなければ、聞とは言われない
熟れた聞 聞は熟れれば、聞かする 用はない
聞かするに用がなくなった人を(老僧)なつかしくもたまにはお会いする事がある
黙って聞かせてもらうの聞法を

△

黙ってを聞くを平常心是とも、平常業成とも伝えて来た
この黙っての聞がいつでも説く人と聞く人に分れて来た
黙って聞かせてもらう このことを、説く人は 説く人 聞く人は 聞く人と別れあやまっ
てきた
黙っての聞ならば あるがまゝに、説く立場である場合は 聞く人であり 聞く立場である
場合は 説く人である
このことを知って居らないから 説く人と聞く人との分離が歴史的に再構成され しかもこ
の間違ったことが寺院教会に於いて当然になっている
それならば 説く人と 聞く人とは、どちらがむずかしいと思うに、説く人がむずかしいの
である
聞く人は無我無中になれるけれど、説く人は夢中にはなれない
いゝかげんな事でごまかしている
人の作った音声に力んで声を大にして 説教同朋運動とわめき立てゝいるなぞはそのいゝか
げんの最たるものではないのか
説教を止め 同朋運動をやめ 僧職人 一人一人が餓死してはどうかと思う
餓死の出来ない僧職人がなにをしても 平常心も 道も 平生業成も見付からない
さて餓死の事だが 無茶なと思うでしょうが 説教も同朋運動もたゞにぎやかだけの事で其
甲斐なければ 自体は餓死と同じではないか
こう感じて来るととむだな説教同朋運動をやめる事の他に 聞法はない せめて日本だけで
も一人の教職人のいらぬ日本でありたいものだ
あらゆる宗派 仏教を問わず 全くいらぬものは 説教同朋運動仲間をふやす運動である
しかしいらぬと私は云うても、入用の人々とは対立感情はないことは云うまでもない
運動か商売かは知らないがこの事の入用の人々に それは悪い おれは正しいの対立感情が

あるならば 盛んに一生懸命やっている人達よりなおさら 思い上った説教である
凡ゆる宗教の宗派と対立は消えた 自由に生きる自体宗教（自由人）である
千万人退くともわれ一人行かんの独善でなしに
千万人を相対にして 一人行くの独り、千万人を相手に出来ることではないか
熟れた 聞法ならば、千万人との対立は消える
対立の消えた世界に、なんの指導教化同朋運動がいる
宗教に指導性教化の意味のないことを 宗教というようである
孔子も七十にして心の思うまゝ行動して道にはずれなかったと聞く
こゝにも仲間の入用の指導性はない
聞くことの消えた宗教、聞くことはいつの間に、いずこにかいった
先日まで確かに在った 聞かんとする憶い、今日はわれ身辺に見当たらない
どこでどうなったのかは 少しもわからない
又どういう理由（ワケ）かも探そうともしない
淋しいかと云えばそうでもない
いつどこで忘れたのか、春の日ウララカ ボウッーとしている
対立の心持ちのあるうちは 宗教ではない
対立の感情を死守すをあわれと思う六十七である
対立（ヒトノモノ）対立（ヒトノモノ）対立（ヒトノモノ）と呼んでみると必ず自分に 自
分のなにかを死守する心持ちが還って来る この事を人の歴史は感情と云うて来た
対立を死守するの対立感の 感情の暴性を人は自信だ信念だとあやまっている
そうして感情の動物だ人は と都合のよい理屈におぼれている
よくよく考えてみると 感情は自分にあるようにあれど さにあらず、相手を赦されないので
思上りに過ぎないのだ だから感情は 自分のところにある品物ではない 自分のところにあ
る品物は赦せないと炎やしている ほのおの火熱だけが自分のものである
相手のところの品物を 自分のところまで強引に引きずって来て しかもそれを赦せないと
わめいていることが感情と云うわけにはならないと私は思う
私は六十七になるまで いろいろの人ともいろいろの交友関係に於いて ようやくに感情の
持主は私ではないことを知らされた
確かに感情の火元は他人様のものだったを知ってほゝえんでいる 感情の火元は他人様のも
のだから私は火をつけなければそれでよいのである 火をつけたらそれこそ丸焼けになるまで
のた打ち廻るのが関の山だ
自分のものに 自分で火をつけて 自分のものが炎えるだけのものならば 人間は感情の動
物だと云う事も成り立つであろうか
他人様のものを がまん出来ないと裁いて その裁くことが感情の動物だとは 余りにも勝

手の言分ではなかろうか

それで良からうが 悪からうが 他人様の事は親でも妻子でも みんな それであれで
うにもしなくてもよいのではないのでしょうか 本来どうにもならない一人一人 どうにもして
あげられない一人一人 又どうしてももらわなくてもよい一人一人は独立者ではないか

もとから生活(イキル)とは ココは アソコ アソコは ココ 誰れかが云われたように
万物流転するのではないか

さすればこの流転を 流転する体に自分をするか 否かに生活はあるのである

流転は自分の体 体は流転 一刻の今は永遠 永遠は一刻の今 アソコは ココ ココは
アソコ 何事もどうする事でもどう出来ることでもない

凡ゆるものは 消え去る 現われ 相へ済みのことではある

だから感情の動物だなどと偉く個執するはナンセンスである

然るにこのナンセンスの意味のない感情に支配されていることを生活だと思い込んでいる

しかもこの感情が善悪を計る物指しであるとさえ思っている

善悪は人間の知る感じる範囲では絶対にわからないものだ ただ凡ゆるものは流転する 現
れたものは消える 消えたものは 現れる命 について行けない 自分を気付かずして その
場 そのことを よいだ 悪いだ 都合がよい 都合が悪いに支配されていることを感情と云
うて狂っているに過ぎない 余りにもあわれでないか

その刻 その場だけに人生を区切ったら感情も意味もあるが 人生とか生活とかは その場
限りのものではないのである

こう云うとそんな事は知っている誰でも思うであろうが 私は静かに人様の態度を視せて
もろうているうちに 安外この人生生活をつかさどる一大法則を知らないのに あきれてさえ
居る近頃である

自分勝手なわがまゝを今日までやって来て まだまだ是れからもつゞけるのだぞ

それは自分も少しは悪い それよりは他はもっと悪いと 他に注文がある あれがこうなら
ないから これがこうだと、いやはやどうにでも好きなように お勝手にと云わざるを得ない
世のさまざまである

せめて 私は善悪は私の個執の感情の世界にはあるが 一步退一步して考えてみてと願う
退一步の一步には 善いだ悪いだは少しもわからないものである

△

作家は 作品を残す、宗教人(自由人)は なにも残さない

作品を 残す作家、なにも 残さない宗教人

自ら態度は異なる、異るとは なにが異なるのか、形のものにと、形のないものにと、

宗教人は形のないものに果てる、形のない仕事の面目にある、作品のことはなに一つ知らな
い、文学画陶器のことなぞさっぱりだ

しかし人の心のことについては、私は 私なりに、宗教（自由）は人を救うものだと信じて疑わない

人を救うの宗教は、人の心を安定させる

宗教は人を 救うの宗教とはと、宗教人は考えているであろうか

救う宗教とは 考える、救う宗教は なにを救いというのか

億万余の冊子教典は教えを説明した紙片に過ぎない、コク明に説明した紙片が救いではない
さすれば救う宗教とはなにを救いと云うのか

救いを考える 当然に、心のことであるに 限定される、救いは心のことである
では心とは私のどの部分に在るのだろう

昔から心は目には見えないと云うが

見えないとは と見えないをたずねる

見えない心は 見えて、見えないを見せ 見えない

見えないは 見えないと云う名ではないよと、見えないを 見えないと見せている

見えないを 見えないの思いにしてはならない

見えないは見えないを不易（カワルコトナク）と、見えないを 見えないで語って
いよいよ明らかに見えないをわれ等人間に知覚させている

もしも見えないが見えたらこの世界は 形はなくなるのである

人がかわるがわるに人類生活を宇宙に出来るは、この見えないの生きた命にある

生命とは見えないに生きている、見えないは生命（ワタクシ）として生きている

この生命とは 人はかわる がわるに 生まれ 死ぬる のことである

見えない生命 見えないの私はない

かわるがわる見えない命の生死を活きている

見えない生命には見えないの私有性はない

見えないを私のものにする、背のびして物を見るの見る見えないにする

見えないに人は背のびはいらない 見えないに従順であればよい

六十七の老翁はこの見えないに今日は 従順を知らせてもろうて、従順に 従順を 見えないと温まっている

△

見えない世界のことを仏者は浄土と云う

見えないは 浄土であればこそ、往生は見えないを 往く

見えない世界は生死の命（イズミ）である

生死の命（イズミ）の見えないを世界を 肉体の上では 心（ミナモト）と云う

この心は万人共通の動（ハタラキ）の基盤である

動（ハタラキ）の基盤だから 心とは 未だ動（ウゴ）かざる大暴雨の芽である

心を 動く と 使うてはあやまる
心は 動くの芽ではあれど、未だのものを 未だと活きている
未だのものを生きていればこそ心である
心は動の未然形なるが故に、大千世界即ち神仏につながっている
必ず 自然に動くの力を蔵ってある
しかれども 心の名のうちでは、この名前の心は静でも動でもない
心は未だ活きている静でも動でなしと 心を静や動に思うては この文化は、思想の遊戯に
人の世を弄ぶ徒事(イタズラ)よ
世に流行する修養(同朋・同友)精神鍛練などは、皆このタグイにぞくする徒事
心は人間の努力無理に依って、形を変えられる自由のものと思うている
心は大千世界宇宙につながっているが、残念にも人間の御都合思いとは縁は切断されている
ものだ
心は 人の執ではないから、鍛練や修練の苦難に於いては、どうにもなる品物ではない

△

或る日の対話であった
なにを考えていただけますかと 問われたから なにも考えて居ませんと答えた
そうすると それまで修業した修養をつまめた人には なにも語ることも出来ないと言われたから 一寸待って下さい 私は心は なにも考えては居らないのが心であると 考えていない心のことを心であると言ったのであって 私はなにも考えて居らない心の持主であると言ったのではない
あなたに なにを考えて居られますかと問われる、から 私はなにも考えてはいないと心で答えたのですと云うたのです
それをばあなたは 心ではなく なにを感じて居られますかと あなたの思いの執で問われたのだから 考えては居ませんと云うたのです
しかしあなたの執を持ち出して この執を心だと認めては悪いのですかの問いにはなんと答えてよいやら私も途方にくれたことであった

△

執と心とは異質性のものであるから 執で向われても心では答えられない それで、執と心について書いてみよう
先ず心と云うが心とは 万人共通のものである
共通のものではあれど 共通のこの共通をば 私のものには出来ないことを 心と云う
だから心は共通のことではあれど、私と云う私の上に 私と他とは共通にはならない
執は万人個々別々に一人一人のものだけに 私のものとして 私だけが使えることになって
いる 執は初めから共通性はない

執と 心のつながり（関係）はと

執は 心に咲いた花であれど 実ではない、執は 花は咲くが 実とは結ばない

だから執の花 は実ではない

執の花は見ていて美しいことである、執は美しい花に終わっているものである

執の花どんなに狂ってもあばれても、何等の実体のないものなるが故に、あれ狂うことが真剣であればある程、その執の花は美しいのではないか

執が美しいだけのことであると云うことは 万人共通のものだが 私にだけ通用する 私の花と咲いて 執は私に終る

だから 実とは結ばないことに於いて美しいのではないか

実とは結ばれずして 心に咲いた花の美しさを、美しく歴史して執は 執を流れている

△

人類歴史の相伝 心と執 の順次のことを書いてみよう 人間に於いて 血は流れる生きて
いる心は憶う 憶うことに於いて心の実在（アリカ）は知らされる

心は憶う 憶うは心 憶う心に続いて 執と云う花は開く 即ちあれこれと 悲喜の執の花
を満開させる、血は流れているこの肉体に

だから憶うことに於いて 執の花を開き この執の花はこの肉体に咲き肉体に散る

心とのつながりは持たぬ あくまでも私だけのものである

執の持っている絶対の権威は 価値は自分のものであるにある

執の自分のものである 証（アカシ） 他人のものでは 間に合わない品物である

だから執は個人のものであれど万人のものではない 万人との共通性は初めからないから
執の花の百花ランマンの美しさもその原因は他のものではないことは絶対に間違いはない

自分のところに咲くべくして 咲いた花だもの 自分のものと大切にするより他にないもの
である

執は自分のところに 自分のものとして咲くべくして咲くものだ 咲くべくして咲く 心は
憶う 憶う心に 咲くのがだから 咲くべくして咲くと云う

咲くべくして咲かなかつたら 人は人でない 執の花が咲くべくして咲くのが人である し
かしその花をどんなに咲かせるかはその人 その人の経験とか考え方の深い浅いに依って又花
の色も香りも大きさも美しさも違って来るから人生とか 人の世とか 社会とかと云う大きな
問題を解決する事の出来る花にもなるのである

どう云う花を どう咲かせるかの 問題は余り私の関心のない事なればペンを走らせないこ
とにする

△

さて執であるが 執と我執とは同一にならないを私は今日まで気付かなかつた

我は 心の部分に付着したことであれど 執の 部分ではなかつた

だから 我は 我を 執するにはならない

我は 憶いにならないうちは執の出勤は 創らない

我のうちでは 我であるから 心であり 即ち動でも静でもない 執の基盤動の未然 台風の芽である

考えてみれば 我は心の部分ではあるけれども 執即ち憶いではない 憶いでなかったら執にはならない

「我心」「執憶い」「言葉離れる」こんな順次次第に「我」「心」「執」「憶い」「言葉」「離れる」をならべてみた

そうすると 心我は 生まれる以前の問題である 生まれる以前だから心とか我とは 神仏霊界に領界であると考えべきことではなかろうか

執や憶は 形を持って 生まれ来てから 人間だけに付属していることである(霊界に付属しない)

こう考えて来ると 心は我は私でどうしなくてもよい品物であるし 執憶いは私だけがどうあっても角力取って なんとか都合のよいように 勝負ではなしの勝負にしなければならないことであるは間違いはない しかもこの勝負は時には命まで賭けるのだ

それで一口に昔から 我執を離れる云うて来たが、我は 憶いにならなければ 執にはならない 執に憶いがなくなったときは 我ではなくなってしまうのだ 執のみが生きた人間の全体となっているのである

そうすると 私は「我」「心」は 執の母体ではあれど執ではないと信じている人は執ではなかったら 救いは成り立たない 救われるを問題としなければならないのは 執だけであるのではないか

だから執に救いはあるが 我や心には救いはない それをば 心や我が救われるものと思っている

なんの気なしに我執を離れると説いているのではないか

又書くが きまりとして心(我)は万人共通のことであるし 執は一人一人の私のものだから他人にどうしてもらうことのいらぬことである

だから「我」「心」はどうしなくともよいのであるし 執はどうにかしなければならぬ

さて我は執ではない 我と執との区別を人はこのからだでしなければならぬ 考えで区別をわかって 何等の意味も価値もない

どうしても明確にしなければならぬのは執は命である なんの命か 救われるの命だ この命をからだでしなければならぬ

かくの如く心の順次の次第は 我と執とをこれは我 これは執と区別しなければならないのに 我執と 我と執を結んでいる

余りにも自分に不真面目ではないのか

それならば 我と執との区別の根拠は 我心は 生まれる以前のことからのつながりで「浄土」を持っている 生まれる以前の命の浄土に其根は深く大地の創まりに根を下していることは どなたも承知のことではないか

執はこの浄土との縁はない 執は人の往生だけを命とした内容のことである
だから我執と続けるならば 往生は消える 往生が消えたら 無論浄土との縁は切断される

△

人に救いはなくなるのである、人の救いが無くなれば宗教はない
宗教（自由）がなくなれば コトバは 人間の作った動物の音に終る
人に救いのあるはコトバ（浄土）にある
救いのコトバ（浄土）は 神のコトバ（浄土）を云う
人の作った 音声には救いはない
人は神のコトバ（往生）を持っていて 往生は神のコトバと人は無理せずに承服出来る
神のコトバは承服するに無理はいらない
無理のいらない 人のコトバは、神のコトバに依るが故なり

△

私がこうして書いているのも 皆コトバであり コトバを文字に現わしている
だからコトバは正直な其人であり修正はきかないものである
コトバの正直は本来は自分である
コトバの怖ろしさを知らされたのも近頃である 不用意にも ながい間使うてきた口の軽薄さ（ウソのコトバ）ほんとうを言うて居らなかったを六十七はしみじみと感ずる有難くも
コトバに軽薄のあるうちは 救いとは縁もゆかりもないあわれの自分であった
人間の全人格を完全に「もの」はコトバに依る
コトバの完全性を知らされるに私は六十七までかゝった 恥ずかしいことである
しかしうそは言わないと云う対立のある私のコトバでない事であるは言うまでもない 私はうそは云わないになつては 人間は底知れずに落ちてゆく
さて コトバの根元意味は 書いたが このコトバの使命に於いて又コトバはコトバを書く

△

人の救わるゝは 浄土のコトバに依る
人は 浄土のコトバを聞く往生持っている
往生のコトバは 往生しなければならない私を、往生させるものだ
私を往生させる 往生のコトバは、私で 使うことは禁じられている
往生は浄土のコトバである
故に私の往生は 私のコトバではない歴史（本願）である
往生に 私のコトバが少しでも入るならば 人には往生はない

往生は 浄土のコトバである

△

往生に私のコトバを用いてならないとは

ドロ田に美しい蓮は花開く

昔からこの蓮の花(シヤワセ)を 願望して来た

しかも信仰の対照に蓮のウテナにと、蓮の花を目あてにして来た

この蓮華目あての信心は残念ながら、人の世にはないのである

ドロ田に咲く蓮華は ドロ田に咲くが、浄土で 開く花ではない

それをば 浄土の蓮に信仰するでは、人間の生きているドロ田の往生は、一体どこにどうなるのだ

蓮の花だけがほしいのだ、ドロ田の往生はいらないのだとは、気狂い沙汰ではないのか

ドロ田は 蓮華の花 往生はドロ田、いわゆる 次第は往生からの浄土ではないか

ドロ田を否認しては蓮の花は咲かない、ドロ田に往生の華は咲く、ドロ田の執に往生の蓮華は開くのだ、執のドロ田の他に 蓮華化生はない

それをば蓮の華だけがほしいでは、往生もドロ田の蓮の根も葉もいらないと云うことになる
余りにも道理をはずれているではないか

蓮の華がほしければドロ田は大切よ

ドロ田が往生するのだ、ドロ田に往生するのではない、ドロ田の往生の蓮の華には(執)

私のドロ田私の往生と云う私と云うものはない、あるは私のドロ田への私の執のみにくさのみ

静かに憶うべし

ドロ田が往生してドロ田に蓮華の花は開くのである

このドロ田の往生 私の往生は認めてくれない

私に往生する力は私にあるとすると、私の往生が入り込むことになる

往生に私が入っては観念(オモイ)になる、観念になるから我執と 我と執と結ぶ、我執と結んでは、「我」「執」と即ち心(我)まで執の部に入れる

執は 心(我)の領分ではない

執は執を執するの憶いである

執を執するの憶い母の乳房から初する

物を手に 持つ口に入れる 自分のもとの人のものとの区別する

そして名前 物まで自分のものだと執する

このことには我はない 執のみである

それをばながい歴史は我執に離れると伝えて来た

私は我は心はどうする事もいらぬことだと思ふ

なぜか我心は 生まれる以前からのことである
執は生まれてからのことである
そうすると まじめに 考えるならば
我と執 とは別名のものであるから、我執と結び付かんのである
我（心）は生まれる以前にして 浄土を持っている
執には 浄土の縁はない
我（心）が執ならば 往生は成り立たない
往生が成り立たなかったら、浄土の 救いはない、往生は救いにはならないものだ
救へは 浄土の救いである
往生は 宗教の位置に於いては 執のことである
それをば 心や我が往生するものだと 思い込んでいる
執は 往生する 執であれど、心又は我のように浄土を持っては居らないのである
今しばらく 執について
執は往生必ずを 執と云う、必ずだから古文書には必得往生を云う
必得往生の必ずとは 必ずとあるからには、一人一人のものを指した場合を云う
即ち 執は自分の執でなければ 執の解決はない
又自分の執でなければ 自分には入用ではない
執必ずの往生を持っている
どんな様相有様にか
浄土心（我）を基盤として しかも、明らかに 我心ではなく、執は私である執であればこそ、私の執は 私の上に往生は初ごととして誕生する
この往生の誕生 他人には手はふれさせぬ
一人私のものなるが故に、私に於いてのみ 往生は誕生する
果遂を歩んで来た 執の苦難の道であった
この執は私にとりては よくも生きて来られたの感ひとしおであり、感銘深い法悦でさえある

△

昔から古書に
天親の我一心と 親鸞の我一心とは
同じでないと云われて来たのも
この辺の消息のことではなかろうか
専門の学問を読もうともしない
又力もない私が勝手のことを云うのだから
全く見間違いかも知れないが

素人だから又書ける意味もあるので書く

天親は我心を「往生」に視られたのではなかろうか

親鸞は明らかに「心は浄土に遊ぶなり」と我一心を 浄土に視られたは確かに
古書に書き残されてあるではないか

△

さて宗教とは救いのことだと 救いのことはこれで済んでしまった

書かないでもよいから止めにするとして 又書く 自由人(宗教)の自由さはこんなところ
に

自由人は書く 対照はない 自由に書く 絶対に残らないものを書く

相手のないものに 残る道理はない

楽しんで 好きに 好きなことを書く、独り 苦しみながら書く

楽しみながらとは まことに知る

苦しみながら生きるのことよ

生の苦しみながらの楽しみは止められぬ

△

生は苦しみながらに堪えての楽しみに、行けども 行けども を歩むものだ

往生を杖として 浄土の道をどこまでも、七十二才の西行は山頂の広川寺へ

往生の一息一息一歩一歩の杖をたよりに七十三は浄土へと消えられた

七十三の西行の浄土 小さい土まんじゅ

土まんじゅには二米近い松が四五本雑木と仲良く西行の浄土の道づれとして立っていた

△

救いには往生浄土のコトバは、「いない人には」、「いないと思うてはならない」

救いの往生浄土のコトバは、どなたにもいないのである

どなたにもいないコトバ このいないコトバのいないをいないに確かにしなければ
入用であったが 知られないのである

よく注意し考え深く憶い念ずべきはこのいない人にはいないは、最もつゝしむべきコト
バである

だからいない人にはいないと言うてはならない

仏様が私を幸せにして下さるのではない

幸せになれるは 仏様、だから 人は仏様ではない

幸せになれるは 仏様だけなのに、人が仏様に なれると仏凡一体にした

人が仏様になれる仏凡一体に考えると、仏様は人と関係はなくなる

幸せになれる仏様、私の前に 後に居て下さる

幸せになれる仏様、前に後に私をはさんでござる

私を中には喜んで暮してござる仏様、幸せさまの 仏様、私と暮してござる仏様
このござる 仏様を、私はいつのまにか盗み取ろうとしていた
恥入りの痛みをしきりと身にしみ渡る
どのように盗もうとしていたが、仏凡一体と盗もうとしていた
即心成仏と まねであり、仏様の上に立っての号令であった
この号令平地のコダマでもどって来ない
仏凡一体は早合点の盗み根生
前に 後に居て下さる仏様をば、わがものと 盗んでしまっている
前に 後に 仏様は居て下さる、後は 前の仏様 前は後ろの仏様
幸せの他にない まんなか、私の住居は このまんなかだ 前と 後は 仏様にかこまれた
幸せに両手をとられている（他度得生）
だから私が 幸せになるのではないと云う
幸せになれる（二益） 仏様
この仏様盗もうとしてはならない
盗もうとすると（一益）他度得生にならない
往生はこの世の私のことではない（二益）

△

先に書いた 世尊我一心 と云うたとて 私があってはならない
私があると 私の世尊一心になる
我一心は 浄土の無碍光如来である
だから 心は浄土に遊ぶなりと、親鸞に於いては、浄土は遊びになるのであろう（他土碍生
は浄土のお客）

浄土に遊ぶと云われたとて、親鸞の私ではないのであろう、浄土の心 即ち世尊我一心であ
ろう

私もいろいろの事に痛めつけられて、浄土の世尊我一心を六十七は身にしみて味わう
それは頭下げよりないとも思うてみた、おれが悪いと覚めてもみた、落第だ 落第だ と
も云うてみた

しかしいつでも 往生の我が付着（ツイテ）していた
この我 往生の為への我れへの化物（バケモノ）であった
私の生きるは 我の往生の為ではない
我一心は世尊にいだかれて
聖母の像のように 浄土に遊ぶの、世尊我 我一心の浄土である

△

大切なことは この我一心も 覚えたら聖母の母と子を引きちぎる

近頃この覚えることのおそろしさに、身も心も痛む 六十七である

人々は どうして狂うて来たのか

どこの どなたの作品(教化)の目モリが間違っ来て来たのかは、わからないが 結果に於いては 教える 覚える あやまりに人の生くるに 痛ましい限りである

聖母の親子を引きさいている

この覚えた事のあやまり足下(アシモト)を知ろうとはせぬ

人は足下は視られないものだ、足下の見える自分になることは なまやさしいことでは自分のものとはならない

覚えたいのだし 覚えたであるから仕方はないが、覚えたとは 足下を忘れてしまうことだ 覚えた 知ったで 足下を忘れる このことは相対(ヒトサマ)の批判にかゝり果て 優越感を味わう

この優越感には人には止める事は出来ないものである、しかも常に高所に自分を位置し この高所から下界を見下している、そして生活の態度は 上を上をの形而上を遂うて 天上界の住人になり切っている

聴聞とつゝまじやかに 座したことが なにかを覚えると、なにかとは 小さい小さいおれが執分別知(体験経験)を云う

このおれがの執 分別知は 自分も確かに少しは悪いが、相手の悪い事は猶大きいと自分の分別(経験)の物指で計るを執するのだ

こんな混同は止めて小さいおれがのおれがを大海にでも捨て、はどうかと思う

覚えると海をこんな事に人は自分を作り上げるものだと思うと悲しい近頃である

しかしこの穴はだれでも 必ず一度入る穴である

この穴に一度入ったら悲しいことには はい上る事はどんなにしても出来ない

同じ穴でも 落ちた穴なら上られるのだ

入った穴と 落ちた穴とは同じではない

入った穴からは 足下は見えては来ない

落ちた穴なら 足下は明るく照されている

落ちた穴に落ちたは 人生のすべてを悔いのないわが物とさせる

悲しみも 悦ろこびも わが物と悦こべる

どんな悲惨な目に合い どんなつらさを身に受けても 落ちた穴は助ける 必ずに

そして人の世は貧もよし 弱いからだもよし 若い時の失恋の痛手もよし 家庭生活に入って 夫の外で作った女もよし 妻の間男もよし 大事で家が焼けたら焼けたでよしと

落ちた穴はすべてのことをこの五体(心口意)に悔いのない感銘をわが物と感じ謝することを与えさずける

落ちた穴 落ちた穴 落ちた穴に手を合わすの六十七である

落ちた穴は足下の照覚である 落ちた穴は手を合わせるの正覚の六十七である
かく落ちた穴は助けずにはおかないが 入った穴は無際際（ハテナシ）と狂うてゆく
余りにも大きな異いが出来る、穴は穴でも 落ちと入ったは
しかしどちらがよいでも 悪いでもない
覚えた（経験）に執し 覚えたはこんな差異の出来上る人の世であると書いたまでだ
どなたでも 覚えると こんな事に入る穴になるものだ
だから 教ゆる事も 難かしいが 聞く事は 猶々難かしいと先人もなげかれて書き残され
てある

△

静かに考えてみるに、覚える事がどこの曲り角であやまるのか
私も覚える 努力覚えることへと、覚える何十年を覚える事に賭けて来た
なにかを探しての 何十年間、求めての聴聞に懸命の何十年間
いずれを取り上げても、間違うことにきまっていた 曲り角であった
いずれの過去を取り上げても 求め 覚える 入ったこの穴の苦難の道であった
この苦難の道 わかれば又先がある 先がある又わかればならないと、執の積み重ね
への努力に懸命であった
求道よ 師に友よと ながい間かかっていたの私
はっきりと入った穴を歩いて来た しかもこの入った穴からは はい上ろうとしなかったを
今は身にしみて感ずる老いは教ゆる
私がわかったのではない 六十七の老いは教えてくれた
そして探し求めての積み重ねのながい四十年の徒然を身にしみて憶う
六十七の今ようやく六十七の徒勞（イタズラゴト）が知らされた
いつ誰方に導かれ 教えられるともなしに、いつとはなしに四十年のふらふらの徒事に、な
にかと淋しくその源を探し求めての徒勞（イタズラゴト）を、とてもとても なつかしく恋し
くとまで老いた身につきまとうてしまった
徒（イタズラ）らごと 徒らごとの 徒らごと、ながい四十年に近く、喰べる為に なに一
つ仕事はしなかった
財産もない 才能もない、時々喰べるものはないから 働かねばと、働く心持ちに思うて
みるが、その度毎に いつでも いつも、働く事は出来なかった
確かに狂っていた人間であったのだろう
どう狂っていたのか 今にしてわからない
怠け者とか 体力が弱いとかではないことは間違いなかったようだ
ただ なんとはなしに このなんとはなしはなにも出来なかった
強いて理屈をつければ 能なしの、求道であったのかも知れない

能なしにも 求道はあってよいはずだ
けれども なにも出来なかった これが私の全能力を上げての 能無しへの低抗であったの
かも知れない

だって これより他に出来なかったもの

△

低抗と云うても 夢の中に探したとでも云うのか
この狂った低抗の心持ちの持続は三十四五十六と今に続いて来た
それで今日はどこでどうなったのかは少しもわからないが、なにも考えては居らない
考えて居らないから、考えは 重点ではない
考えが重点でないから、川の水が流れるように流れる
いろいろのことはいろいろに流れ流れる
流れは流れを流れ 流れを少しも裏切らずして 流れてゆく
自分のことも人様のことも、考えない 流れはどなたの上にも、そうですか そうですかの
悲は流れ、流れの悲はいよいよ浄い流れの悠久を
悲は 慈をば 流れる果て知らず、この流れに流れて来た
私も今日まで、考えてみるに 人の為 世の為 自分のことにも 力を入れてみたことはな
い

少年 青年 壮年時代を憶い出してみても、なにをどれだけとの目的も 目標も無かったを
過して来た

確かに頭のどこかの個処の機械が狂っていたのであろう
職にありつくとか 商売をするとか 財を集めようとかは
そんな気にもなってはみるが、なにが禍いするのか知らないが
とにも角にも 近くは妻子を困らせ、世の中へは迷惑のかけっぱなしで、今日六十七にさせ
てもろうた 一言の文句の云うことのない六十七だ
文句の云われない今日までをふり返ってみる
口で云い 心で憶う位の有難うではない、有難うの他ない有難うは お家内様 お子供様
世の中様だ

△

戦争中もあちらこちらと遊び回っていた
負けては 良いと思わなかったが、戦争の手伝いする気にはなれなかった
そうかと云うて 敗けた二十年八月十五日は
とめどもなく 二階で涙を流した
あの涙は今以てどう云うわけかはわからない
勝つと思わない戦争に敗れて、負けたのに 涙の流れるは どうすることも出来なかった

これで 日本人と云うのかも知れない

△

あれから 二十年 あれから

心の痛みを初めて 人の幸福の上に、心の平和のことを 一筋に歩いて来た

人と人 民族と民族 国と国、いつになっても 平和は来ないものだ

悲しい人類社会生活のあけ暮れである

人と人の和 国と国との利害 民族と民族の歴史的感情 いつになっても争いの他ない

しかれど 人間は 独り静かに相手もいらず、心の平安（ヤスラギ）争いはないでもよい心
持ちにはなれるやの気がする

このことに生きることより他に能はない

私 このことは 昔から生きている

このことの この土に泣いたあれからの二十年 この土は泣いた二十年

あれからの二十年 日本人が幸せだとも思わない

世界に平和が来ることも信じない

宗教や哲学が人類の闘争の問題を解決してくれるとも信じないから、神仏霊とか精神心魂の
文字も、人類になんの意味も幸せももたらすものではないと信じている

だから私は 唯々願い 望む心からなる祈りは、人々が心から 自分に正直にまじめに 自
分の態度を常に平安に安らかに、お互いが 自分が自分自身に安らかであってを祈る

能のない力のない私の出来ることは唯これだけ この祈りだけ

△

或る日 小林さんはいつからこんな考えの人になられたと尋ねられた

そうだな あの戦争だな

そうして負けた二十年八月十五日が私をこんな人間にしてくれたと答えた

戦時中の配給制度にはなんの気なしに、喰べさせない喰べるなでは戦争は負ける、赤い紙の
尊さ 人の命はこの一枚の紙に 銭湯に行けば見る度毎に やせてゆく子供の背に、涙を流し
たは忘れる事は出来ない

あれからの二十年 あれからの二十年

経済は豊かになった 物資は夢の数字になった

しかし人の心は平安であるであろうか

娑婆の事は私の身辺から消えた今日、この事だけが この事だけが

あれからの二十年 あれからの二十年をいよいよ鮮明にさせてくれる

あれからの二十年 この事だけが私の祈りであり願いである あれからの二十年

人々の心の平安のこの事、この事を

あれからの二十年 好き事は止められない

好きなことは 見付かるものだ
見つけた事でなかったら 好きなことではない
あれからの二十年 好き事に獲られてしまった
少しの無理にならずに 西行の旅 七十三の広川寺
七十三は山寺の一室に寝て息絶えた西行
好き事が見付かって 河内の山奥の寺の一室で
見付かった好きな事の一息一息
一息の最後を 好きなことといっしょにあれから 八百余年
西行の好きことは あれからの八百余年
息は絶ゆる事なく人々の心に伝えられて来ているではないか
あれからの八百余年は好きなことは
この大地に八百余年を鮮明にして、この日本土に歌聖西行は今も活きている
私はあれから二十年だが、西行はあれから八百余年だ
しみじみと あれからの命を仰ぐ
あれからの命は 私を全く別人にした
あれからは あれからの命をわが身に知らせた
この命 なにするの ものでもない
されどあれからの二十年の命は、私をして好きなことを 好きに、生ある限り 平安(カン
ガエナイ)を楽しませてくれる
親鸞も ヒソカニと仰ぎ(教行信証)、私のあれからの二十年を難度海わたる大船と信楽され
た
西行は山家集を八百余年伝承した
あれからを痛んで 孔子は 心のオモムクママに七十にして則を超えずと云われた
私も六十七になって知らされる
孫が嫁やオバサンのがま口から銭盗った、少しも困ったも悪いも思わない
オジイサンが立替えるから、黙って 見護ってと願うに親しみさえ感ずる
盗る病気をお前の手許でお前が直すのだ
オジイサンはその治りようの費用は惜しまないでな……
落ち付いて考えてみれば誰でもわかる事だ
盗ってはならないと意見するのは、又盗る事だと教え込むことになるである
盗っては悪いと腹立つ心持ちはあれから消えた
盗ったのだもの 次はどううそを云うかに、替っていた、盗ったの悪かったを どうゴマカ
スかにそれをば 正直に盗ったら盗ったと云えとか、今度はカンベンするが 今後はとかは
愛情も親切もない人々には宗教などは 縁も由りもない

出来のよい子 よい孫は 出来のよいでよからうし、出来の悪い子供悪い孫でよからう、ど
ちらもわが子わが孫 百点ではないか
百点でみられる六十七どちらでもない
百点は「執」を消す特効薬であった
人はこの特効薬を忘れている
特効薬とは たった一つにきく必ずの薬である
特効薬はあれにもこれにも効くの散薬ではない
唯私の分別の執に聞く特効薬である

△

この特効薬を飲む事をそのときそのときに覚えた 六十七は
腹立つ心持ち 我まんならない心持ちに煩うことは 昨日までのことだ
今日は娑婆のことには用事はない
悪をとがめたり 善を悦んだり、力は入らなくなった 実に冷たいのだ
しかし冷たいと言う態度は 人々の言う常に冷静でと言う事ではない
力を入れなくてもよいと言うことと、常に冷静であると云う態度とは似ては居れど、全く別
の品物であるから一ツにはならない
本来冷たいことの他に温かいことはない
冷静をよい事のように思っているが、冷静とは裁きの世界傍観の態度である
冷たいには傍観の入り込むスキはない、冷たいは底をついての悲であり温みである
人の地上に常に最後に跡する至上命令はこの冷たさの持つ温みである
一息は絶えた 冷たい骸（ムクロ）は人類の歴史ではないか
息絶えた数十時間後には この物体（ナキガラ）は火葬場に運ばれてゆく
生き残った人々に身を以て教え示すものは この冷たさである 人はこの冷たさに手をふれ
ふれたに伝わる 冷たい 物言わぬ歴史の温かさに人の世の涙は温かく流れるものである
冷たい骸が物言うたら 人類の歴史はどうなるであろうを思うとおそろしくなる
しかるに人間はこの冷たさをおそれて 温かさを求めて温いに迷惑している動物である
冷たい事は一向に迷惑のないものだ
冷たいことをいやがって 温かいを求めることは迷惑になる
こんなあたりまえのことが私もながい間わからなかった
思い出す三十余年前のことだ、十銭のかねで人は救わる、百円のかねでは 助からないを知
ったことを

だから当時の私の住む三河島にキリスト教（新教）の浄化団の活発の活動があった（吉田清
太郎先生も大変力を入れられた）

少しもよいと思えないので いろいろと手のこんだことの妨害をしたのを思い出した

だから当時から社会事業は賛成ではなかった
当時は寺院では余り社会事業とか教化のことに力を入れなかった
今日はよいのか悪いのかは知らないが 昔のキリスト教の歴史のまねにあけ狂ってさえている
一寸淋しいな……寺の本流を忘れて
だから今も指導とか 教化とかはどんな美しい名前でも私は私の事ではない
寺院が教化のことに力を入れたように見せかけなければならないのはその原因はと云えば
「寺を知らない」のである 寺に生まれ 寺に育って 寺を知らない これでは寺ではない
寺ではないのに寺は 寺であるぞと云うたとて いやあとのことはめんどくさいから書かない
ことにする

△

私の考えで 私は憶う
仲間を作り 仲間を集める 会や集団には人の心持ちを 救う力はない
本来 集まりには 一人の仲間はないものだ
私もながい間 仲間の集まりに 狂うて来た慙愧に堪えない
そして自分も狂い 人様までも狂わせて来た
なんとお詫びの仕様とてない 今日(六十七)からはっきりと集まりの仲間は止めにした
本来(モトカラ)集まりには 会とか仲間とかあるのは集まりではない
集まりとは 活きている一人一人に於いて一人の命を持っていることを云う
この一人 一人の命の歴史である 一人の命 一人の史観に命を賭して
一人の苦勞 一人の努力は歴史の実は結ばるを歩んで来た
一人の苦勞一人の努力史観は一人を救う歴史を生きて来た
この苦難を生活する人のみ 一人救わる
一人を救う歴史の苦難は苦難の史観に他ならぬ
一人を救う一人の史観を 一人は生きて来た この事を不用意にも私の救いにしてはならない
私が救われることでなかったら 宗教でないように思っているが それは見間違いだよ
救いは私の救われることのいらぬ 救いのことである
救わるゝを私のものにする事は人様に於いては勝手にあれど 救いではない事は間違いない
しかし救われる事のいらぬ 救いと云うても逆説ではない 逆説にしては観念を弄ぶの見
栄 有難がりや 目の前にぶらさげるホコリ虚栄であるから、この争いからは御自由にと逃げ
出させてもらうよりない
この救われることのいらぬ 救いのことについて書くこともないが書くならば 救わるゝこ
とのいらぬを 確かにと自分のものにしてはならないこのことにみたされればよいのである
少しの力まず力を入れずに
この事はこの文字で止めにするが なかなかこのいらぬを観念でなしに やわらか軽く少

しの荷物にもならず 持つ品物にするには誰でも出来ることではない

自分のものにしないでよい事が 自分のものになる これを逆説で考えると たとえば捨てるは捨てるではないのに捨てるを捨てるとする 捨てると捨てるの間には 時間(オナジデナイ)があるから 捨てるが捨てるにはならないのに 捨てると捨てるをつないでしまう なかなか難しいことだ

自分のものにしないでよい この消息を自然他力仏知不思議いろいろと伝えられているからこの文字のまゝ受け入れ、ばよいのである

そうすればやわらか味も出来 軽くもなる 力も入れないでもよい 目に見えない幸せは知らされる 私はこう云う意味のことを コトバの命と思うのだ

故にコトバ(一人)は集まる場所を探して人は楽しみに集まりの歴史は生きて来た

集まりとはこの一人(コトバ)を集まることであるから仲間はない

仲間の入用の集まりは 私と云うイゴである

私と云うイゴと一人をあやまってはならない

一人には 私の入り込むスキはない

もしも私の一人ならば一人ではない

一人には 私の云う一人は認めない

一人に私を認めると、一人が私のものと云う私が入る

私が入った一人 歴史においては、集団社会への反逆である

同行も同朋も仲間もいない 一人の集まり

常に楽しみ 常に家族に他人(ヒトサマ)に頭も心も下がる衆生(ヒトリ)である

なんの気なしに 大衆とか 衆生とかと云っているが、衆生とは一人を集まりのことである

一人を集まる 一人の社会性を衆生と云う

故に衆生とは 一人より遊離したことではない 一人の社会化である

一人が衆生である 一人は集まりであり場である

この場一人(ワタクシ)の帰依処である

この衆生自覚はいらない

衆生(一人)は 自覚の衆生にはならないものだ

だから不用意に自覚と認めている 衆生の声は口頭禪(ヤコ)に終るのみ

一人は衆生であり 帰依処(知るをいらない)として権威を歴史的としている

歴史的一人 衆生と云う帰依処は与えられた

一人が歴史的(カエルトコロ)でなかったら 衆生ではない

この衆生信樂とも浄信とも伝えて来た

こういうとむずかしいようにはあれどきにあらず

易の易 どなたにも少しの無理にはならない、相手がいらなくなればよいのだ

相手がいらぬは相手は無かつた、一人とは相手のいらぬことを云う
よくよく考えればどなたもそうではないか
なにが どれが 誰と彼とがあてになると云うのだ
地位が名が財が子供が友人が才能が
あてにして 迷惑にはなれど幸せにはなつたことはなに一つと人の世にあつたと云うのだ
いやそんな事はない 物が無ければ幸せはない 教養がなければと云わるならば 私はそう
信じている人々を相手に書いてゐるのではないからその人はその人のお好みに
一体迷う迷うと云うてゐるが、迷とはと迷をほんとうに承知出来るまで考えたことはあるの
か

迷いとは ほんとうのことがほんとうにならないと云う事ではない
なにもかにも ほんとうになつてゐるのに まだこのほんとうにならないと言うならどうも
やむを得ませんな

そんな我がまゝの身勝手の人どうぞ それでよろしいのです
私の書いてゐる立場は なにもかにも奪われ あれよあれよと、すべての自分の生活が落ち
切つても、まだどこかに あてになることがあるのではないかと、思つてゐる人に もうそれ
でよいではないですか、それで充分ではないのですか を祈つて書いてゐる その人を目の前
にして

△

私も六十七になつたら どう云う理由かは知らないが この世の忙しい人には 余り話し合
いたくなくなつた

忙しい入用の多い人は それはそれでよいのである

この世の忙しいに忙殺される毎日を暮らさなければならぬ人々の世の中であるのであるか
らそれはそれでと思ふ

しかし私は 私の身邊に なにする用のなくなつた人に なにする用もなくなつた 用はな
くなつた人の幸せを 用がなくなつたと 天地明朗(イカサセテモラウ)に少しのチリもとど
めず用のなくなつたを 語り合うことを六十七の余つた命は楽しもうと思ふ

△

なにする用はなくなつた

ハダカのままの老人の一人

なにする用はないに この老いはさせてもらった

なにか どうにか なんとか どうにかの「繩」に縛れたこの「繩」から解れた

たつた 一人 一人の老翁

この一人の老人は衆生の一人、なにする事から解れた衆生

なにの為にすることのない信樂(カタリアイ)

なにをする用のなくなったに老人（浄信）はつながれ信じ合える
老翁（トシヨリ）は好いなあ
なにかにもいつの間にか、取り上げられてしまった老人
私でどうした覚えはないのに取り上げられた
娑婆に用事はないように身も心もさせられた
若いときは世の中にいやな老人があるものだ位には思っていたが
今日は吾身が用のない老よりだ
老人は いゝなあ……

世の中とは 老人のきれいなことだ
この老人（私）は知らされた

どなた様かは知ろうとせぬ有難う

有りがとうは どなた様でもよい有難う様だ

どうぞ頼む お老人様のみなさん

生きて甲斐ないとか なんの益もないとか 甚だしいは ゴクツブシとまで思うことは止めて

トシヨリ様よ 有難うと オトシヨリサマこの有難うに優しい日を 優しく 有難うと暮らすを……

トシヨリサマの有難うは六十七に悲するの 私の中にある今一人のトシヨリ様だ
トシヨリ様は 私の中に今一人のトシヨリさまは御座った

△

老人（トシヨリ）様は 老人様の世界を拜むことが老人である

老人とは 今日までの事は なに一つとして用のないことにさせてもらっている

裸（ハダカ）のまゝ一衣もまとはぬに 今日ハダカにさせてもらっている

完全にもうろくである もうろくとは 世間では相手にしてはくれなくなった

特に経済上の事については 世間は相談になってくれなくなったと云う事である

一衣まとわぬと云うがなかなかの老人の大仕事である

解かるは誰も解かる 身に付ける事は難中難のことだ

一衣まとわぬとは着る着物の事ではない

キリストも二枚の着物を持つなと云われたが あれも着物の事ではなからう

まとわぬを着物のまとわぬにすると肌寒くなる まとわぬを心のまとわぬにすると 少しも肌寒さの感はしない 心にまとわぬを 心でまとわぬと吾が心にする損益の一枚ではないから 心は温かい体温にぬくまる

一衣まとわぬは自分で成るのではない

されるのだ されるに抵抗はしても どうにもならない されたとは 境遇を云う

よくよく思い煩うて来たが どうした覚えもないのに私は老人にされてしまった

この事だけでもこの老人に 老人感の反抗を止めると一衣まとわぬは まことにオトシヨリ
サマと自らの オトシヨリサマである 有りがとうの、老人(オトシヨリ)さまは この老人
さまを祈る 祈りのない救いはない救われる祈りをお……救いよとこの祈りを祈られることは
有難い極みである

有難い祈り 黙って 独り 祈る 祈りである

教会もいない 仏さまも 神さまもいない 目に見えない世界に 祈る

宗教(自由)はこの祈りを祈る救いのことである

以上年よりの悦を知らされ、老人は楽しい

明日はどうかは知らないは近づいているようだ

2 法然と盗人耳四郎

耳四郎は法然の多分五十代の弁舌さわやかに仏のクドクにえんの下から 助かって 法然の
前に躍り出たは間違いなからう

其の後 法然に可愛がられた事もそのとおりであったろう

その大盗耳四郎をみんなが(多くの御弟子さん) こんな大盗の耳四郎と同じ場所で 同じ御
教を頂くは 堪えられないと法然に申出た事もさもあるう

その際法然は皆が耳四郎と同座がいやであるならば やむを得ない 耳四郎一人でもたくさ
んだと云われたと伝えられている

私は立ち合うたわけではないから 真意のほどはわからないが これでは修身の教科書のよ
うで 立派に書かれてあれど どこか生まれつき奥歯のない人間のようで 一人前の人間の解
釈や理解ではないように思われてならない

形は人間に立派に出来上っているが 片輪であるには間違いのないのではないでしょう

この事が今日まで八百余年も ドウドウと少しの不審も起らずに来たと云う事が私は世の中
の奇蹟とさえ思われるのである

これだけにして問題を投げてペンを止めにするのも方法と思うが いらぬことを書くウヌボ
レの強い私だから少しか書くとしよう

それは耳四郎はこの世で初めて人となった法然の念仏に値うた法然の言葉で救われたのだから
悦び踊り上るの法悦を全身にみなぎらせて あたりを物ともせず唯法然の声に魅了され一
言ものがさじと 師と弟子とは常に一体一味の法境であられた事も私は信じて疑わない

さてこれからだ 全部御弟子さんの抗議にみんな居らなくなっても耳四郎一人でたくさん
だ

とはオトギバナシや修身の教化には好都合ではあれど 実際に法然が言うたとすると 法然

は耳四郎を少しも可愛がり又慈んで居らなかったことになる

法然はウヌボレの強い気狂い僧であったと云う事になるのではないのでしょうか

この耳四郎一人でたくさんだと云うたか言わないかは知らないが 真に耳四郎一人でよいと信じて言うたら気狂いであるには間違いない

然るに今日まで耳四郎一人でたくさんだが法然を気狂いの傲慢僧にしないのは 耳四郎一人でたくさんだと云うた 法然の中にどんな心持ちがつみ重ねられてあったのか

この事が問題である「憶うに耳四郎一人でたくさんと言わるゝ前の」「今一人の法然」が大事な大事なことではないのか

いわゆる お前一人でたくさんだと防衛や区別の態度ではなくしてお前一人でもよいな……の根元をなす今一人の法然の心持ちが「どこまで耳四郎を待ち」耳四郎を「憶い」悪いことその他出来ない耳四郎をあれ以来「待つて」「待つて」「待つて」の毎日の口称に「お前一人でもがある」のではなかろうか

衆に向うてではないのであるような気がする

(道宗と蓮如にもこんなあやまりがある)

3 三願転入

親しかったあなたへ

静かに 考えてと祈る

一度・二度・三度、同じことをあなたの家内はされた

この三度の同じことは 同じことの 三度なるが故に 人の世では 悲しむべきにも 人の力ではどうにもならない

△

初めの一度は銭で手伝いの足しの少しはさせてもらった

次の二度目はあなたに おれが悪かったおれが おれが悪かったを語って このおれが悪かったを語り合うは正覚の救いとまで夜おそくまで語り合うた (信ちゃんと三人で) 済まないことを語った 済まん事をしたものだ (揖二号の正覚)

この度の三度目で 私は君ではない私が悪かったのだがようやく私に知らされた

未だかつて無かった深い反省の悔いは身にしみた 私が悪かったのだ

だから素直に有難うと合掌する

△

それで私が悪かったのだから 悪かったの一言で素直に身を引かせてもらう

ながいながい間御世話になりました有難う いつの間にか三十余年のつき合いになりましたな

くれぐれもありがとう 弱いからだをお大切に 君の幸せを正直に純に祈って去ります

ぬれをぬれ ぬれるに果てなしをぬれ

関東を去られた親鸞のように 妻よ子よお友達よ さようならと同じように

関東を去られたを揖一号に親鸞の二度の出家と書いたを手がかりにして関東のお友達と 親鸞の思想 内容 関東教化の当時の在り方 なぜ関東を出られたか おそらく苦悩の限りをつくしてであろう 体当りで書いてみたい このことについて次の揖五号は親鸞の苦悩を自分で書き自分で拝みたいと思っている

△

それから私が心からお詫びしなければならない問題は正直に書きます

私が何十年もかゝってあんな場所にしてしまったのだからお詫びの仕様もありません

この事でさあしまったと気付いたのは一昨年頃からでした

あんな場所に あんな心持ちで集まるのでは集まる意味はないのであった 私もし、気になって何十年間もお手伝いをして来た なんとお詫びの仕様もありません 云いわけは コトバの混乱になるだけのものです だから去年八月から来て下さいは止めにするとはっきりと実行したのです

願うは お互い様問題はいつも「他にはない」「自分のところにある」問題を 自分に知ってほしい「問題が他にあると思ううちは」歩いても 正直の歩きにはならない この事は三願转入の唯除にも当たるのではないかと思うので記しました

最後に私が悪かったのだから黙って引かせてもらう お詫びは混乱のもと 宗教に於いては妥協は通じないもの 妥協が通じたら親鸞も関東は恐らく出られなかったろう

お詫びせずに黙って去らせてもらいます

さようなら

聞く事も難ければ 教ゆる事も猶難しと老人も悲歎されたがわかるような気がするようです
四十年四月 六十七才

4 遺産相続

お気軽にお出かけ下さい

このたび重田高松さんのお骨折りで

堀本信(23) 清瀬暉子(22)の二人が

人間の歴史を家庭生活に相続することになりました いつもの集まりの心持ちでふだん着のまま、でお忙しいのに済みませんが 四月十日正午堀本宅へお出で下さい 理屈をいうようですが 結婚は祖先の遺産相続の祝典である 遠い昔から祖先の遺産はこの結婚に於いて切れることなく相続は祝典として受けつがれてきた 受けつがれてきたそのものは 人間歴史の「資産」(行)である 受けつぐ人の立場は遺産(信)である かくしてこの遺産は仏祖に応えた結婚である 故に個人のものという私有性は 遺産相続の祝典の結婚には無いものである

相続は私の上に成り立つことではあれど私のものではない 私のものではない相続は生活史の祝典である 祝典の遺産相続だから結婚は骨折らずに無理せずに あたりまえに「遺産相続」(ホトケサマノヨロコビ)はさせてもらうにあるがまゝである あるがまゝの相続とは 私は見たまゝ あなたは見せたまゝ 虚(ウラ)も実(オモテ)もないに 相続の血はあたたかく心に伝わる二人の幸せのことである 虚も実もないこの二人の上の相続は温かい血は通うに不幸の入り込むスキはない 心に血の通う相続は物ではない 富貴ではない 富貴や物には血は通わない 冷却しきったおれがの世界だけである

このたびの 信・暉子の若い二人の結婚にこの遺産相続を祈って みなさんのお出をお待ちします

追 私達年寄りの今日までかゝって出来なかったことを二人に頼むは無理を承知で

昭和四十年四月

小林勝次郎 (68)

堀本 さだ (65)

清瀬正之助

△

揖四号は 四月十日に信 暉子の結婚はこのような心持ちでやらせてもらいました 心から有難かったので 皆さんのお祝いの心持ちの幾分にも と思ひまして書くことのほか出来ない父親のせめてものお礼の心持ちです

今後とも 二人の歩みが 多くさん集まって下されたみなさんのお心持ちに応えする事の出来ますよう見てやって下さい くれぐれも願ひします

四十年六月

京都にて脱稿

5 口称本願の返事

先日は有りがとう存じました 厚くお礼申し上げます

一寸おたずね申し上げます

口称を本願とせられし衆生行たる名号を聞きました故 私の口わざにかゝらず となえづくめの念仏の衆生となり聞えた一ぺんで早やお助けにあずかり彌陀をたのむ信心が得られ この渡申念仏はお助けにあずかりたることのうれしさを申念仏なりと頂きます

どうぞ聞せて頂きますようお願い申し上げます まことにすみません

昭和三十六年七月十五日

(八十三才の老婆からの手紙)

清瀬さん御返事がおくれてすみません

暑い事です おとしよりは さぞかしおつかれの毎日のこと、と思います

さてお尋ねの口称本願ですが あなたの信じなさるとおり 口称本願は 自分で勝手に思うの本願ではなく 衆生行として(一人の私)廻向(アタエラレ)されて在るのが本願です

だから「私が」「私の」「私に」と云う私のものときめた 口称(トナエゴコロ)はもともと無い道理(ワケ)です

本願が口称を本願とせられし衆生行は いつのときから知る事を要(イラヌ)せず「衆生行」は吾等娑婆の人々に 口称は廻向されて来たのです

このいつのときからに いつのときからが いつのときからを いつのときにも絶ゆる事なく相承(ナガレテ)されているのです

だからこのいつのときからを廻向と聞こえたに少しの疑いも暗いも いつのときも少しも無い道理です

清瀬さん聞こえたと云うことがなかなか

この聞こえたが覚えたにはなれど聞こえたにはならないのか人間の聞こえるのはじまりですがこの事は又いずれ「聞」についてくわしく書きます 今日聞こえたにはならないものだけ云うて置きます

だからいつのときからこの廻向には少しの疑いも 暗いも 不安もない廻向(ドウリ)です しかし清瀬さん 人間に疑いも暗いも不安もないと云うのではないのですよ 聞えた廻向に不安も疑いも暗いもないと云うのです この事を間違わないで下さい ウッキリすると聞えたさあ廻向だと自分に持って来ると疑いもなり 不安もつきまとう 暗いも離れない若存若忘に落ちる人のドンヨクのあわれさではあれど 私が聞いた廻向ではないのです

聞こえた廻向とは 廻向は聞えた いつのときからの昔の昔その昔 不安も心配も昔しの昔にはすっかり消えてあればこそ 昔の昔は仏様であり 仏様の昔の本願(自然)であったのではないのでしょうか

だからいよいよ口称を本願と聞こえたは廻向のいつのときからの本願であったのです

清瀬さん 仏様とは この いつのときからのことではありませんか

であるから 仏様の在られるとは 私に於いてとか 私は信ずるとかの力みは 仏様(アルガママノ伝承歴史)のいつのときからには無関係のことです

このいつのときからは仏様が 相(スガタ)なくして在られる廻向の聞(ジネン)のことだ

から いつのときからの昔に仕上がってこの口称本願は人に聞こえるのではないのでしょうか

人に聞こえると言うと人間の為に本願があるように思われるかも知れないが 本願とはこの世に一人の人間も無くなっても 本願は減しないのであるを忘れてはならないのです

人間の為に宗教（本願）があるなぞは 人間の考えです 宗教（本願）の為に人間が在るのです

だから口称本願は聞こえるお助けの往生はこの土は転じ開ける 故に清野さんの口わざではない 聞いたは称えずくめの衆生の主 もとからの仏様のお声ではあったのではないのでしょうか

この仏様のお声を聞いた一ツで 彌陀タノムの信心が得られることになっていたのが口称本願であったのです 嬉しいことですか

よくよく気付いてみたら いつのときからか 仏様 この仏様の口から本願が生れ育ち 口称を娑婆に絶ゆることのない仏道の根幹はいつからとはなしに衆生行として仕遂げられた本願であるのです

今に 清瀬さんの耳に聞こえるの呼び声はこの仏様の根幹を流れている宗教（お助け）であったのです

清瀬さんのものとして何に一つありませんな お互い様人は心から嬉しく楽しめると云う事は自分のものは「なにもない」と云う事にあるのです このことを案外人は知らな過ぎる 例えば物を大切にすると云う事も 他（ヒト）のものだから大切にすることに楽しめる嬉しさも 感得出来るを知らないでいる

まあこんな事もオバアサン（清瀬）は八十三 私は六十三にもさせてもろうたのでしたな そのことが教えてくれたのだから どなたにと教えようとも信じて下さいとも思わないけれど人のもの 大切位はようやくわかりました 有難いですが

口称本願を悦ぶとはこの人のものを大切にすることにつきるように 私は信じて疑いません

それなのに 昔から今も今後も人は自分のものの大切を知って狂うているのですな

そうかと云うてこの自分のものを大切にすることを私は悪いと云うているではありません どうにもならない文化の低い人間の生きるドン窓の然らしむる本能であるのですからやむを得ませんな

他様（ヒトサマ）のものが大切に出来ることは お助けにあずかった有難さ尊さのことではありませんか

清瀬さん 私はこの他に念仏申すと云う事もないと信じて疑いません

清瀬さん 自分のものを大切にしているうちは念仏は空念仏ですな こんなところに社会生活に酬恩も報謝もない身勝手の慾張りだけです忘れてはなりません

求道者のあやまりの文化 人間歴史の悲しむべき自由は 人は自分のことの他しないものだと云うところにあるのです まあこの事は清瀬さんの御返事以外の事になるのでふれないこと

にします

さて清瀬さん 初めにもどりまして衆生行である名号を聞きました故 とありますが 問題は名号は衆生行であるから 自分のものではない 当然に自分のものを大切にすることは仏道に反する事です それだのにいつどこで間違えて来たのか知らないで 毎日毎日自分のことにかゝり果て、居りますと 困ることをば云いわけにしているのが現代の求道者ではないでしょうか

私は人の迷いはこの世に一声を上げてこの声の次に口に乳房をくわえ入れる そうして他人(母親)のものを吸い取るところに迷いは初すると思うているのです しかし又口にくわえないならば人間は生きられない こんな運命を持って迷うて生を受けて来たのが人間であるから他人のことなぞかまわって居られないことも生まれるから持って来た業であるから迷うに狂うもやむを得ないのでなかなかこの迷いの世界からのがれ出られない事になっているようです

それで迷いの吾等が口称を聞いた衆生行である名号 この衆生行とは そのもとは絶対に聞いたに聞いたの相対の心持ちのないものです

聞いたの相対の衆生行にすると 聞いたの基本(ネコソギ)は全く跡形もなく崩壊(ホウカイ)する 衆生行とは 私一人の上に名号が聞いたと活きている歴史(口カラ伝ワル)を云う「しかも私のものを少しも必要とせずに」

だから名号は衆生行(クチモトニ)として いつのときからの「廻向」(歴史)であり「自然」(ホトケサマ)の道理(オムカイ)である

されば衆生行(トナエツクメ)は 口称本願をば名号(イカウ)され 自然(過去・現在・未来)と切れるわけもなく 少しも吾が口の力を加えずに 生まれると同時に母の乳房を吸うように 吾等の口もとに称えるまでに いつ(廻向)のときからを知らず今に到っているのです だから清瀬さんの聞かれた口称本願は 仏の源から目に見えずに伝わって来た 仏様の法(ハタラキ)ですから仏法は聞くに極(キワマ)ると伝えられて来たのです

聞くに極ることは いつのときからのことであるから 人間の智慧を加えて知ろうとするとなんととはなしに 頼りないような気はするかも知れないが ほんとうは(真実)がいてそうではないのです

もしもいつのときからを 何年何月何日と云うように人に知覚出来たら 世の中には 一人も生きている人はなくなるのです 人間は明日のわからないをおそれて おそれるを明日に頼って毎日の日暮らしをしているのです

だからいつのときからは 遠い遠い自然(ムカシ)の本願(スガタ)を 称えやすい 口称と作られて(衆生行) 吾等人間の口に母の乳房の如くおのずから 成就(ヒサシク)されて母と子の有様であるのが本願です

成就とは物が完成するように思うてはならないのです

衆生行(ホトケサマ)が 聞いた 口称本願(トナエルマデモイラナイ)の決定(ケツジョ

う)をいつのときからと与えて下されてあることです

いつのときからの衆生行(ホトケサマ)だから私で力むことも知ろうとする事のいらぬことす 易の易(やすいやすい)いつのときからの母体ではあれどこの母体は形もない色もない初まりもない 終りもない 成就(ホトケサマ)なれば人々の考えられない広大無辺の自然(ホウカイ)ではないでしょうか

人間は浅い自分の考えで 近いとか遠いとかを連想(オモイツナグ)すれど 連想すれば常識であれど 宗教ではなくなってしまうのである

宗教では遠い 遠い程 久しい 久しい程 人の心身を燈す明るい命であることを純に疑いはないで受け取ることだから この遠い久しいもとからは 仰ぎ尊ぶ他力(ホトケサマ)の慈悲(ナツカシサ)であるのです(如来サマトモ云ウ)

他力に生まれ他力に還る 知ろうが 知るまいが 認めようが認めまいが他力に還る

それであるのに 宗教とは今の現在に効果のないようものは宗教でないように思っている人もあるが これは本来の宗教ではない もとから(ジネン)の宗教とは形の上に幸福や不幸を信仰には絶対に視ないのです 人間社会生活に間違っはならないことは この功利(ソノバカギリ)の幸不幸を身上に扱うことにしてはならないのです

形而上のことは倫理道徳を一步も出ないことであるから宗教ではないのです だから知ることのいらぬ もとから申す念仏の お慈悲(ナツカシサ)には人間の考えは入らないのです 仏道者人(ミチヲヨク)はこうしたことを耳から心のうちに聞いて

もとからの この御慈悲の呼吸を出す息吸う息に多くさんの人さまが清瀬さんのように お助けにあずかりたることのうれしさよ有難さよ と口称されて来た伝承歴史(ホトケサマ)です

この口称(レキシ)の呼吸をば 自然とも法爾とも 負けて信を獲るとも 念仏の衆生であるぞよと仏道は闘い取って下されたのです

私共が闘い取ったのではありません 口称本願(ホトケサマ)の歴史の仏道が闘い取って吾等に称え易い 名号と与え下されたのです

この仏道の歴史こそ先人の尊い苦難の闘いではないでしょうか

本来の苦難の闘いには人生問題とか 人間はなぞのヒマはない 唯々この道一筋に あらゆるものを忘れ去り 独り何物かに導かれて この苦難の道をゆく人として数少ないこの道をゆく 難中至難とも行く人ぞなしとも説かれてある

私も六十三になった この苦難の道を捨て切れずに 非僧でありながら非俗になれずに 無為徒食いたずらに暮らして来た 思い切って人様に物乞うまでも云い得ず 下さるを待って来た浅ましいとも悲しいとも思う六十三である

かく乞食生活より悪い私の淋しみは 教える 人の世はなぜにこんなに憎み合い争うのだろう それも些細なことに 私の無能ではどうにもしてあげられないだけに 悲しい 唯々祈る

人の世 あ……

どんな事情でも負けて下さいよ 勝負は止めて下さい オレガワルカッタ に泣いて下さいよを世のさまざまに祈る

仏道はこの祈りに 口称(オサマリ)されている 本願(モトカラ)です

清瀬さん八十三までの苦難の道を独り親鳥が卵をあたゝめるように あたゝめて来られましたな……ありがとうと心から私は嬉しいのです

そうして口称本願を私に教えて下されたを正直にお礼を云わせてもらいます

よくよく考えるに 清瀬さん私は貴女のように口称本願の実践者ではないのです どうしても私のような立場は貴女がたから教えてもらうことをば 「まねる」「口で云う立場のあわれな」「ニセ者です」これが私の正直な実体です どうぞ清瀬さんお赦して下さい

唯貴女の彌陀 頼むの実践を慕い 少しでも近せてもらうのです

八十三のながい 旅愁(タビジ)の不可思議の求道を仰いでペンをやめます

いろいろむずかしく書きましたが 今これより書けないのです 又いずれ 勉強させてもらって もっともっとやさしく書けるときが来たら書きます 返事がおそくなりましたお赦して下さい 大切に 毎日毎日を元氣でお暮らし下さい

昭和三十六年七月二十四日

小林勝次郎

口称本願の行人

清瀬 きみ 様

6 冷たい私

憶う忘れられない 憶い出

私の 冷たい苦悶

二十九才の青年時代だった

このムネの 冷たい苦悶を、かきむしり取ってくれる人はないのかと

この冷たい苦悶に もだえた

呼吸の止まる一步手前、発狂 自殺 は少しも不安でなかった

三十余年前のあの苦悶を憶う

この憶い 憶い出す毎に私にとっては、常に新しい 昨日のようだ

三十余年昔とは少しも思われない

こんな新鮮な 冷たさが、私をいつもいつもぬくめてくれる

理屈をつければ原因があるようだが
理屈をつけられる程度のことは、人間から薄らぎ 忘れ去るものだ
冷たい苦悶に理屈はない
原因や理屈のつく苦悶なぞは、生きるの回避に過ぎない
回避に なんぞ真実が熟れよう
私の迷い初め狂い出したは、この冷たい自分に初まった
そして苦悶の本体は何物かと、いろいろの名僧牧師をたずねた
その結果得たものは なんにもなかった
得たものは なんにもなかったからこそ、今日六十七の冷たい は活きている
活きている六十七の冷たさ、薄情ではないのである
薄情ならば六十七は全滅である
冷たいと 薄情 全く異質のものだ
薄情には人間の温い心持ちはどこにもない、在るは 打算あるのみ
冷たさは冷酷無悲のようであれど、さにあらず
私も冷たいに苦悶を初め、苦悶の冷たさの自分に苦悶の三十余年
冷たい自分に泣いて居られるに出会う度に、温かい微笑を発起させてくれる
人の世に大切な大切なことは、この冷たさに泣く 冷たさに在る
逆説ではない
冷たい自分だ 冷たい自分に、いつも人は慈に悲にぬれるのだ
冷たいは 慈に悲にと救われる
冷たいは 救うの慈であり悲である
冷たいに冷たく 泣いて下さいよと
私は六十七年の今日
この冷たいに泣いている人々を、祝福するの私の幸せを覚めた
△
されど薄情で泣いている人はあれど
冷たい自分を冷たく底の底まで、泣いている人は まれである
これであやまるのだ
冷たい自分を 冷たい人間だ位の、底を作っては 薄情になれど
冷たいが底の底にならない
冷たいは底の底の他ない、底の底に冷たいはしみ透る
冷たいは いつの間にか、冷たさではなくなってしまう
私も二十八九に冷たさが浸透するまで、冷たい自分に苦悶しなかったら
六十七の今日の冷たい微笑はない

人々の 冷たい人間だと告白さるゝ度毎に、黙って この冷たいを温く視て上げられる
黙って 黙って である
冷たいに苦しんで居られる人々には
どんな場合でも第三者の口バシは、入れてはないを人には忘れてはならない
冷たいに(自分)泣いて居らるゝ尊さに、拝み且よかったでしたなの祈りの他、なにものも
ない

しかし人は冷たいに泣いている人は少ない

薄情に狂うている人のみではないか

狂いの薄情は 自損損他の、キズ付けあいの他ないを悲しむ

薄情と冷たいとは同じではない

薄情はいつも要求がある

この要求の浅い親切に人はよろこぶ

私は人間の親切は止めてと、しきりに憶う昨今である

人間の間に人間の親切が無くなれば、どんなにか よかろうと思う

毎日の日常に人間同志の親切程、いやのものはない

この親切おれがの執がつきまとう

それならば 親切はしないでもよいのかと問わるゝならば

人間の親切と思う親切が悪いと云うのであって、親切はするな悪いと云うことではない

酒に酔うたよりの親切はしてはならないと云うのだ

聖書にもある友の為に命を捨てるこそ、最大の愛なりと

人は一生に一度位は この聖書のコトバの愛にふれる行違いもあってよいのだ

この聖書のコトバにさわらせてくれるは冷たい人でなければ

出くわすことはないを三十余年前に、私はこのからだで闘い獲ったは

今も昨日の事のように、思い出してもそのことに感謝している

あの際私に少しの親切心でもあったら、聖書のコトバは身に活きなかった

おそるべきはこの人間の親切心である

親切心は私を 裸にはしてくれない

私を裸にしてくれる聖書のコトバを身につけさせてくれたは、冷たいこの心であった

冷たいこの心は強引に、友の為に全財産を失うても、私が助かるのであった

私の冷たさはいや応なしに、この冷たい救いのコトバを、我がものとさせてしまった

今もこの私の冷たさに感謝している

そして三十余年前の出来事をおして

冷たい私に私は冷たく、感謝のよろこびは身にあふれて

今も友だちの冷たいと云わるゝ

悲鳴によかったですな よかったですなの、ぬくもりの感銘深くよろこべる
冷たいの正直の純真に合掌させらるゝ
冷たい 私の冷たい悦である
冷たくなかったら 必ず、冷たいをとがめたであろう
それを冷たかったの悲鳴に、心から悦びよかったですな……を、知らざるゝとは冷たいは
救いの宝庫の無限である
されど 冷たいと薄情とは、同じでない事を忘れてはならない
好き事を好きにかゝり果てると、好きなようにしたいとは、同一ではないと同じように
人は好きなようにしたいの好き、を好んでいるが
好きなようにしたいが、少しでもあれば、それは 好きな事ではない
冷たいと薄情の異なるのも、こんな些細なところにある

補 記

- 1) 小林勝次郎は「楫」という字の木(きへん)を手(てへん)にして「かじ」とよませた。「楫」、手と口と耳で人を指そうとしたのかもしれない。
- 2) 小林勝次郎の文章には独特の送り(「てにをは」)や構成がみられる。稿本にした大阪騰写館版(B6変形縦書き18字×17行)では改行と分かち書き(語句と語句の間の1字空白)が頻繁にくりかえされ、句読点はまったくない。稿本に収められたかたちそのまま掲載したかったが、紙幅の都合と読みやすさのため、分かち書きはそのまま、行送りをのぞく改行箇所はコンマ(,)で示し、小林純子の判断で一体とみなされる文章はつづけて表記した。勝次郎による改行箇所に対して、コンマで示して改行しなかった箇所と実際に改行した箇所があるが、それはそのときどきの形式、文意にのっとり、小林純子が判断したものである。
- 3) 小林勝次郎は3カ所に「形而上」という語を使用しているが、掲載にあたっては「形而上」とした。
- 4) 稿本では31頁(本稿137頁)までは文頭が1字下がっているが、32頁以下は下がっていない。本稿では読みやすさのため、32頁以下も文頭を1字下げた。なお、掲載にあたっての読みちがいや解釈の誤まりについてはすべて木村と小林の責任である。

3. 小林勝次郎についての注釈

1 私にとっての小林勝次郎

『揖四号』は「コトバと云う場合は二人以上のことだ」で始まる。私はこのことばに強くひかれて小林勝次郎を読み始めた。勝次郎のことばは、人にとってことばとは何であるのか、人はなぜ話すのか、話すとは一体どういうことなのかという私が抱き続けている問いとつながっているように感じられた。読み始めてみると、そのことばの力強さと迫力に圧倒されるばかりだった。ものに対する外からの観察や説明ではなく、勝次郎自身の中にあるなにか、既に勝次郎自身のものであるものについて勝次郎が語っているという感じだった。はじめのうちは勝次郎独特の「てにをは」に慣れずすこしとまどったが、声に出して読み上げてみるとより多くのことが理解できるようになったのはとても不思議なことだった。同じようにことばを受け取ろうとする行為であっても、「読む」と「聞く」とはまったく別のことなのかもしれない。読むにつれて、聞くとはどういうことかという問いが私の中に起きた。普段私たちは無意識のうちにしゃべっている。話すという行為にあまり特別な注意を払わない。語る、しゃべる、話すということしか意識がなく、聞くという行為を私たちは見逃している、忘れてしまっているのではないだろうかと思った。また、私たちは耳から入ってくることばをほんとうに聞いているのだろうか。「聞く」ことを私たちは知らないでいるのではないだろうかとも思った。

勝次郎は二十代の終わりから九十一歳で亡くなるまで一切定職をもたなかった。「好きなことは形のないものだ／好きなことに形は在っては好きなことではない／だから好きなことを好きに続けるは(形而上)に決別(オワカレ)してからだ」と書いているが、勝次郎は半世紀以上もの間、ただ一人で「形のないもの」「好きなこと」だけに向かい続けた。「法は曲げられん」と何度もいわれたそうである。勝次郎はただならぬ決意をもって「法」を探して一人歩いた。勝次郎は実際にそれをしたのである。どれほどの決意、どれほどの道だっただろうか。まさに命懸けだったのではないかと思う。『揖一号』が出版されたのは昭和三十三年、そのとき勝次郎は六十歳であった。『揖』はその後二十二号まで続くが、昭和四十六年の『揖六号』以降、小林勝次郎という著者名は勝次郎の意志により記されなくなり、昭和六十二年からは『みんなのもの』という書名になる。「みんなのもの」とは晩年に勝次郎がたどり着いたひとつの世界である。

真理、真実、法、道などことばはさまざまであっても、普遍的なもの、絶対的ななにかを見出だそうとするとき、人の多くは内側ではなく外側に向かい、自分以外のものや他人に求める。自分の力で探そうとするのではなく他から得ようとする。インド人の思想家クリシュナムルティは「真理は道のない地である」と述べた。真理というようなものがあるとしたら、それに至

る方法は千差万別、人の数だけあるのではないかと私は思う。決して人によりかかって得られるものではない。そうして得たとしてもそれは自分のものではなくいわば借り物でしかない。私たちがまずしなければならないことは自分で見て聞いて感じて考えることではないだろうか。『揖』をはじめ、勝次郎が書き残したことばは一人で歩き続けた勝次郎の歩みそのものであり、勝次郎が通過した場所、行き着いた場所を示している。勝次郎の生き方、勝次郎の残したものを見るとき、自分の足で歩くことの大切さ、そしてそのことがなしうる力の大きさを私は感じる。元気がわいてくる。小林勝次郎という人は私たち若い世代にとってもひとつの証であり、確かな標なのである。勝次郎は色紙にこう残している。「自分のもので自分を育てるのだ／他人の花がどんなに立派でも自分の花にはならない／こんな当たり前のことを知っている人は皆無に等しい」。

2 ラカンとの共通点

- 1-1 小林勝次郎「コトバと云う場合は二人以上のことだ」「二人以上の場合でなければコトバは 人間社会にはコトバの役割を果たさない」（『揖四号』）
- 1-2 二人（以上）の場合のみことばであることば。二人とはなぜか。
- 1-3 J. ラカン「それゆえ他者とは、聞いている者と一緒に、話しているわたしが構成され、一方によって言われることがすでに返事になっている場所である……」（『エクリII』弘文堂）
- 1-4 「私」が構成される場所—他者。ラカンのこのコメントは他者という場所なくして「私」は構成され得ないことを示している。
- 1-5 投げかけるものと受け取るもの、語る者と聞くものという二つの場所が存在し、その二つの場所で作用しながら考えたり生んだりしているのが人なのではないか。

3 小林勝次郎の「聞（もん）」

- 2-1 親鸞による『一念多念文意』には「聞其名号というは、本願の名号をきくとのたまえるなり。きくというは、本願をききて、うたがうころなきを聞というなり。またきくというは、信心をあらわす御のり（ことば）なり」とある。
- 2-2 人が「聞く」と呼んでいる行為の中身は何か。
- 2-3 『揖五号』で小林勝次郎は「聞」と「聞く」について次のように述べている。

「それで聞くと聞と この二つのながい真宗の歴史においては 人間の問題として言い伝えて来たが、この事について思うに「聞く」は外界のことにつながる。いわゆる相対的である人の話を聞くことに中心点がある。「聞」は相対的ではない。自分の心とか精神とか自分の心体の内部のことである。」

「それで どうして耳は聞になってはくれないのかと言うならば 耳は判断分別あれば、

あれこれはこれと耳は聞き分ける力を耳の全部であるから 皆価値の問題と化て この価値判断の世界からは 耳は出ることは不可能の耳である。」

- 2-4 「耳」は価値判断のゲート（門）。「聞く」ことにおいて行われているのは分類や分析、価値判断など、自分のもつ知識や経験や思考に照らす作業である。
- 2-5 私たちは「聞く」のではなく単に「聞き分けている」だけなのではないか。
- 2-6 「だから聞法とは 聞く態度の完全を聞法と云う／聞く人は聞くものは消えた／聞かせる人は 聞かせるものは無い／ホッテ置いても聞いて来る／聞法は聞くものではない」（『搦五号』）
- 2-7 「聞く人は聞くものは消えた」=聞いたことを分析したり照らしたりする思考の対象、知識や経験などが自分の中にない状態。聞き分ける、判断分別のないこと。
- 2-8 私たちが語っているものは何なのか。
- 2-9 小林勝次郎は「経験はイゴである」とも述べていた。

4 クリシュナムルティとの共通点

a. 人の知覚を妨げるものについて

- a-1 小林勝次郎は「聞」について語る中で、人が「聞く」と呼んでいる行為の実際は「聞き分ける」であり、「聞く」ことにおいてはつねに「聞くもの」が存在すると述べている（2. 「聞」について）。
- a-2 小林勝次郎の「聞くもの」とは人の中に蓄積されてきた経験や観念化、抽象化された知識や思考である。それは人の純粋な知覚を妨げるものであり、クリシュナムルティの「イメージ」に相当すると思われる。
- a-3 J. クリシュナムルティは「見る（=see, observe, perceive）」ことが人にとって重要な行為であるとしているが、人は心や思考がつくりだした「イメージ」によって生きており、「イメージ」は実際にあるもの、起きていることを見るのを妨げ、現実的なものとの関係を妨げると述べている。
- a-4 クリシュナムルティ「観察するとき、人はそのものやその人について自分がつくりだしてきたイメージを通して観察している。そのイメージなしに、ものごとや人を観察することができるか。」（J. クリシュナムルティ『問いと答え』「クリシュナムルティ・ノート」関西大学社会学部紀要第29巻1号、2号所収）
- a-5 「聞くもの」「イメージ」はともに現在ではなく過去であり、事実ではない。

b. 「聞」と「注意」

- b-1 小林勝次郎は「聞く」は相対的であり限られているが一方、「聞」は相対的でなく外側に相手をもたないと述べている。

- b-2 小林勝次郎「この事について思うに「聞く」は外界のことにつながる。いわゆる相対的である 人の話を聞くことに中心点がある。「聞」は相対的ではない。自分の心とか精神とか自分の心体の内部のことである。」(『揖五号』)
- b-3 「聞」は耳、聞くという行為だけの問題を超えており、その点も含めてこの「聞」はクリシュナムルティの「注意」と深くつながっているように思われる。
- b-4 クリシュナムルティ「すなわち、心全体が完全な注意を払っているほど注意深くあること。そのような注意は、人が注意している中心が存在しないということを指す。人が集中するとき、それはある中心から、ある点からである。それゆえに、それは限られており、制限されており、せまい。一方、注意は中心をもたない。人の心の中のすべてが敏感で、注意している。そのとき、人は、注意している中心が存在していないということを見出さずだろう。そうした注意においては境界はないが、集中には境界がある。」(「15行動」『問いと答え』)
- b-5 b-4のクリシュナムルティのコメントで下線部分の「注意」を「聞」、「集中／集中する」を「聞くこと／聞く」と置きかえると小林勝次郎の「聞」はより理解しやすく、また両者の共通点がよく見える。

c. 「一人」について

- c-1 両者とも「一人」という状態をひとつの単位、それじしんで既に充ちた、ある完全な存在としてとらえているように思われる。
- c-2 小林勝次郎「それで良からうが 悪からうが 他人様の事は親でも妻子でも みんな それであれでどうにもしなくてもよいのではないのでしょうか 本来どうにもならない一人一人 どうにもしてあげられない一人一人 又どうしてももらわなくてもよい一人一人は独立者ではないか」(『揖四号』)
- c-3 小林勝次郎「集まりとは 活きている一人一人に於いて一人の命を持っていることを云う」(『揖四号』)
- c-4 小林勝次郎「一人とは相手のいらぬことを云う」(『揖四号』)
- c-5 クリシュナムルティ「何にも頼らないということは、人が一人であるということ(=alone)を意味する。まったくの一人、全体——それが正気である。」(「8 苦痛」『問いと答え』)
- c-6 ゆるぎない状態「一人」。多数・集団と対立するのではない「一人」。対立物に依存してあるのではない「一人」。

d. 組織について

- d-1 両者とも「一人の人間」それじたいで独立した存在としてとらえているためか、組織・集団に対する考え方にも共通するところがある。

- d-2 小林勝次郎「あらゆる宗派 仏教を問わず 全くいらぬものは 説教同朋運動仲間を
ふやす運動である」(『揖四号』)
- d-3 小林勝次郎「仲間を作り 仲間を集める 会や集団には人の心持ちを 救う力はない」
(『揖四号』)
- d-4 クリシュナムルティ「もし一つの組織がこの目的(真理を求める)のためにつくられるな
らば、それはまつば杖、弱点、束縛となり、一人ひとりを不自由にし、人が成長し独自性
を確立するのを妨げるにちがいない。人の独自性は、その絶対的で無条件な真理を自分の
力で見つけることにある」(「星の教団解散宣言」)

e. 自由について

- e-1 クリシュナムルティが世界をめぐる人々に話し続けた目的は「人間を自由にする事」で
あった。それは思想や宗教、知識や経験などあらゆる思考の束縛から自由になること、解
き放たれることであり、クリシュナムルティは「be free/be free from」という語を用い
ていた。
- e-2 小林勝次郎「裸(ハダカ)のまま、一衣まとはぬに 今日ハダカにさせてもらっている
(略)一衣まとわぬとは着る着物の事ではない キリストも二枚の着物を持つなど云われ
たが あれも着物の事ではなからう まとわぬを着物のまとわぬにすると肌寒くなる
まとわぬを心のまとわぬにすると 少しも肌寒さの感はしない」(『揖四号』)
- e-3 この小林勝次郎による e-2 のコメントは経験や思考、知識など受け売りのものを一切身
にまともずにいる、クリシュナムルティの「be free from」である状態と対応しているよ
うに思われる。
- e-4 小林勝次郎の「対立の消えた」状態についてもクリシュナムルティが望んだことと共通点
があるように思われる。
- e-5 小林勝次郎「凡ゆる宗教の宗派と対立は消えた 自由に生きる自体宗教(自由人)である」
(『揖四号』)
- e-6 クリシュナムルティ「私は本質的なただ一つのことだけにかかわっていく。人間を自由
にすることである。私は人をすべての檻から、すべての恐れから、自由にしたい。新しい宗
教や宗派を興すのでもなく。新しい理論や新しい哲学を打ち建てるのでもなく。」(「星の
教団解散宣言」)
- e-7 小林勝次郎「対立の消えた世界に なんの指導教化同朋運動がある」(『揖四号』)
(小林純子 <http://www02.so-net.ne.jp/~ryu-t/index.html>)

4. 小林勝次郎著作目録

○著作物には当初は著者名が記されていたが、昭和47年以後なくなった。

小林勝次郎『信仰観方』昭和7年（活版）

小林勝次郎『悲願』昭和22年（直筆メモ）

小林勝次郎『聞法 [壊土真宗における]』昭和27年（ガリ版）

小林勝次郎『揖 その一』昭和33年

小林勝次郎『揖 その二』昭和35年

小林勝次郎『揖 その三』昭和39年

小林勝次郎『揖 その四』昭和40年

『世の片隅に追悼を』昭和42年

『法要に應えて』昭和43年

小林勝次郎『揖 その五』昭和45年

『揖 その六』昭和47年

『揖 その七』昭和47年

『揖 その八』昭和47年

『頼まれていたを聞く』昭和47年

『揖 その九』昭和49年

『揖 その十』昭和49年

『一周忌に寄せて』昭和51年

『揖 その十一 飼われて』昭和51年

『揖 その十二』昭和53年

『揖 その十三』昭和54年

『揖 その十四』昭和54年

『揖 その十五』昭和54年

『揖 その十六』昭和54年

『揖 その十七』昭和55年

『揖 その十八』昭和56年

『揖 その十九』昭和56年

『揖 その二十』昭和57年

『揖 その二十一』昭和58年

『揖 その二十二』昭和59年

『みんなのもの 第一』昭和63年（色紙筐）

無為庵・小林勝次郎の「揖」(木村・小林)

『みんなのもの 第二』昭和63年(色紙筐)

『みんなのもの 第三』昭和63年

『揖 その二十三 小林勝次郎追悼号』平成2年

○放送

『NHK 宗教の時間』昭和61年2月2日放送

*これら小林勝次郎の著作物は「無為庵文庫」(〒913-0031 福井県坂井郡三国町新保 教林寺)として三浦素文師によって保管されている。

勝次郎のことばを「みんなのもの」にすべく、このようなかたちで再録することを快くおゆるしいただいたご子息の堀本信・暉子夫妻(〒606-0812 京都市左京区下鴨上川原町22), 大阪騰写館の助田茂蔵老師, 西弘寺住職の伊東慧明先生, 勝次郎の最後を看取られた植田邦子さんに心よりお礼申し上げます。

—1999. 3. 10受稿—